

# 天道と人道

—二宮尊徳研究(3)—

下 程 勇 吉

## 目 次

### 3. 後 篇 天人一貫の道

#### 甲) 天人一貫的主体性への道

(一) 「天地のもじり尽きせぬ貫ぎ繩」

(二) 天性随順の道

(三) 化育賛成の道

(四) 一心決定の道

(五) 南面無為の道

(六) 青天平歩の道

(七) 「忠勤の弊」

(八) 陰徳長養の道

(九) 随時素行の道

(十) 隠忍退蔵の道

(十一) 和而不流の道

(十二) 各器円成の道

(十三) 一器水平の場

#### 乙) 天人一貫的共感性への道

(一) 同根同体の道

(二) 共感兩全の道

(三) 「人氣相進む」自他共感性の道

(四) 「恵む手の見えぬ」報徳の道

(五) 報徳全功の道

### 3 天人一貫の道

#### (甲) 天人一貫的主体性への道

##### (一) 「天地のもじり尽きせぬ貢ぎ綱」

もともと「天の分身」として生れ出た人間は、かくして大孝的報徳源道において「仮りの身を元の主に貸し渡し」、「天道の父母のところへ」奉公に帰るとき、「身の節、天地に当り、氣、天地に通じ、天地・氣体一時和合し」(全一、353)「天道人道相和して、自然その身に備わる」天人一貫の主体性(アイデンティティ)を享け、天保3年11月13日上々天気の日には(全三五、446)、

始まりも終りも一つ己が身に  
一つうちに一つ尊し

とも詠まれ、「本元唯一、神人帰一。初能く一を踏めば、終必ず一を得」とも書かれ、その前々日にも、「今朝、天氣我が心に継ぎ候歌に」と前書して(全三五、445)日々是好日の風光が、

今日今日を暮ると知りてねむる身は  
あくる日ごとに楽しかりける

とも詠じられるのである。このような天人一貫のアイデンティティを享けるに至るのは、「己が住居をここに定めて、昼夜ある」「仮りの身」を「元の主」に還元し、「日月とともに輪廻すれば、昼夜なし」といわれる不止不転の天道とその一円行道を共にするからである。実に「木陰にも道のありける月夜かな」と詠まれたように、天の超越的な光によってのみ、人の道のアイデンティティも確認されるのである。

この点を決定的に証示するものは、すでにあげた猿丸太夫の詠をふまえて鹿の身に体现された自然法爾の天人一貫のアイデンティティを説く個所と同時に、天保4年9月に記された日記の一節である「人、天地の間に生じ天地の間物を喰い、天地に成長して天地間に住みながら、天地とともに行くべく、天

地とともに勤むべく、天地とともに尽すべし。元來、我が身、我が心、天地のものにして、我がものにあらず、我が身と我が心、我がものならざること、知りばらば、人として不足なし、不自由なし、心の欲するところに成就せざることなし」(全一、524)。さらにこの章句の次には、「天道は盈を虧きて、謙に益す」という易經をうけて、「満つるを受け、欠けるを足し、これのみ心掛けなば、天道の代めいなりと知るべし」と「天下商人買賣行道時節鏡」が掲げられている(全一、525)。まさに天地とその不止不転中正一円の行道を共にし、天人一貫のアイデンティティを体现するものである。

「己が住居をここに定めて、昼夜あり」といわれる「仮りの身」としての人間は、日々刻々燃え尽きて行く一ちょうの蠟燭として、その時間は刻々天から奪い去られるのであるが(教林、1)、その「仮りの身」を「元の主に貸し渡し」、「天地とともに行き、天地ととも勤め、天地ととも尽し」、「日月と俱に輪廻して、昼夜なき」ときは、人は天地とともに不止不転の時間を享受し、「元の主」としての天道という「胴取り」から脱体现成的に日々新たな時間を丸儲け的に贈られるのである。すなわち、上に引かれたごとく、「仮りの身を元の主に貸し渡し」報徳溯源道においては、「人と生れ出たるうえは、必ず死するものと覚悟するときは、一日活きれば、すなわち一日の儲け、1年活きれば、1年の益なり。故に、本来我が身もなきもの、我が家もなきものと、覚悟すれば、あとは百事百般みな儲けなり」(夜話、10)といわれたのであるが、さらに次のように「我が道の悟」が説かれている。「およそ事は成り行くべき先を前に定むるにあり、人は生るれば、必ず死すべきものなり。死すべきものということに前に決定すれば、活きているだけ、日々利益なり、これ予が道の悟なり」(夜話、42)。「人、生れて死するものと心得、空に帰すること(を)自得いたしなば、迷うことなし」(秘下、413)。さらにまた次のようにも説かれるのである。「五十才にして死せし人を、逆に勘定すれば、五十一年目には、人なきなり。然らば、五十年生きては、丸儲けなり」(秘下、17)。生命に執着する欲念を去れば、生きてだけ丸儲けである。道話27にも曰く、「五十才の人、五十一年前を考えて見よ。また死して後

も、考えて見よ。何もなし。金銀も、取らざる前を見よ、また(人に)やってしまった後を見よ。碁盤の目なく、白黒の石なくば、如何にすべき。欲しや・惜しやを取って見よ。妙、その時にあり。死んで後、妙あり、白紙を読んで見よ。」無から見れば、何もかも積極的生産性をもつのである。語録161に曰く、「天を(若死)感え、(長命)寿を欣ぶは、人の情なり、しかれども、(天命)天寿は命なり。ただただ身を修め、もってこれを俟つのみ、それ五十才にして死す。これを逆算すれば、すなわち五十年前、此の人なし。しからばすなわち五十年間生を保つ者は、また幸ならずや。」かく悟得するとき、日々刻々燃えつきて行く一ちょうの蠟燭にたとえられた50年の生命の時間は、刻々天から奪われて零に向って微分的に消滅して行く過去の消極的なものではなく、逆に零から積分的に生産する時熱の根源性をもって天という「元の主」から贈られるのである。すなわち「仮りの身」を「元の主」に貸し渡すとき、その一日一日は「元の主」の天から新しく「貸し渡され」賦与せられる将来的積極的なものという意味をもち、人はここに帰家穩坐的に「その身その身の立つ分を知り」(我がおちつくところ)「ここを先途とつとめる」日々是好日にして自彊不息のアイデンティティの境地に住するのである。(論語述而章)「憤を発して食を忘れ、楽しみて憂を忘れ、老のまさに至らんとするを知らず」と題して(全一、889)

身を捨ててここを先途と勤むれば

月日の数も知らで年経ん

と詠まれるのである。まさにこの一境は、天人合一帰家穩坐の場である。ここに人は文字通りの「先途」に住して、脱体現成自彊不息の行を全くし、よく天人相貫のアイデンティティを現成するのである。

この点からして注目せられるのは、尊徳が「仮りの身を元の主<sup>に</sup>に貸し渡し民安かれと願う此の身」を「天地のもじりつきせぬ貢ぎ縄」としてその天人一貫的アイデンティティをとらえていることである。幼少の頃から夜業として縄ないにいそしんだ尊徳は、右へーもじり左へーもじりと縄をなうことに喩えて、自然界・人間界・報徳行道の形相を表現している。第一に、「世界の縄は、寒暑往来なり」といわれ、その寒暑往来の「世界の縄」に即して生き

ている「人間の命は、食いてつなぐ縄なり」といわれている(教林、24)。寒暑往来という「世界の縄」は、天道の形相であるに対し、「食いてつなぐ縄」は、人道の形相であるが、その「食いてつなぐ縄」としての「我」はまた(全一、893)、

己が身は如何なるものと尋ねれば  
(陰陽)水火と食と三つくれの縄

と詠まれ、さらに「寿命」と題して(全一、876)

天地のもじり尽きせぬ命綱

ただ長かれと願う(え)諸人

と詠まれ、また天保4年9月の自筆日記には、

天地のもじり尽きせぬ縄なれば

ただ長かれと願うこの身は

さらに「忠信」と題して(全一、881)

天地のもじり尽きせぬ貢ぎ縄

ただ長かれと願うこの身は

と詠まれ、天保5年4月改めの鶴沢作右衛門の仕法書には、この道歌に「天地人一物一体」と題せられて、明確に天人一貫のアイデンティティが「貢ぎ縄」という含蓄深き一説で言いあらわされているのである。かくのごとくして、天道の寒暑・陰陽往来という「世界の縄」に即して、「食いてつなぐ縄」または「命縄」としての「仮りの身」は、今や「元の主」に奉還せられ、「忠勤」一筋に「天地人一物一体」の報徳行を貫く「貢ぎ縄」として天に捧げられるとき、それと行を共にする天がその「貢ぎ縄」をもじりて已まぬところとなり、まさしく天人一貫のアイデンティティを享けて、全き意味で「天上天下唯我独尊」の「天の分身」となるのである。というのも、もともと神・仏・天聖と人とは、その体の気が相通ずるからである。「大円鏡」附録(全一、125以下)に曰く、「神の体の気は我が体に通じ、我が体の気は神の体に通ず。神の体と我が体とは一円なり。氣自在に交満してやまず。神、我、元を悟れば、二ならずして元一なり、この故に、天道自然という。」(天)神(仏・聖)と

我との間を不止不転自在に変満して已まぬ気は、神の体<sup>(極)</sup>に至れば、我を含み、我の体に至れば、神を含むのである。このことは、桜町陳屋障屏文字に「男至誠<sup>(誠の極)</sup>なれば、すなわち女気を含み、女至誠なれば、男気を含む」とあるのと、同一の構造原理によるものである。すなわち、天の気よく至誠の極<sup>(極)</sup>にいたれば、その気は感応道交的に人の心に通じ、人の気よく至誠の極<sup>(極)</sup>に至れば、その気はまたよく神の心にかなり域に達するとせられるのである。ここに「天の分身」としての「仮りの身」を一円空にして「元の主」としての天に「貸し渡し」、その一円仁の心を「腹中に入れ」、「人ため」に生きぬくとき、「人の気にかない申すこと、これすなわち天の御気にかない」、よく「上、天命に配し、下、人心に合する」天人一貫のアイデンティティを享け、天の命ずる性のまにまに生きる道が開けて来るのである。すなわち天性随順の道である。天の命ずる性に随って生きるとき、「天道人道相和し、自然その身にそなわる、これを道という」(全一、469) ところ、人は全き意味で「天の分身」として「天上天下唯我独尊」と性格付けられるのである。

#### (一) 天性随順の道

かくて「仮りの身」を捨てて、「元の主」の「天に貸し渡し」、その命のままに脱体现成ここを「先途と勤むる」とき、我は「天地のもじり尽せぬ貢縄」となり、天命に素し、その命ずる性に随って天人合一的に生きる天命随性の道が報徳溯源道の大動脈をなすのである。夜話201に曰く、「それ性は、天の令命なり。身体は父母の賜<sup>たまは</sup>なり。その元、天地の令命と父母の丹精とに出づ。先づこの理より窮めて、天徳に報い、父母の恩に報う行いを立つべし。性に随いて道を踏むは、人の勤めなり云々。」尊徳は徹底的に心読した中庸第一章の根本命題に即して、天の命ずる性について、次のごとく説いている。「それ物おのおの性に随うものあり、性に背くものあり。葭の性は、湿地に随って乾地に背く。故に山上に植えるときは、生長しがたし、たとえ生長すといえども、永年を保し難し、終に枯渴す、かつ自ら山上に生ずることなし。如何となれば、葭の性地味に背くが故なり。もしこれを水辺あるいは湿地に植えるときは、自ら生長して、永年を保つ、これすなわち、地味に随う

が故なり。山嶽丘陵は植えれども、生長せず。水辺は植えるをまたずして、自然に生じ、生育するものなり、これこれを天理自然と知るべし」(全一、471)。天の命ずる性にしがい、「領中の人、非人に至るまで飢えず寒えざるように和均する、これを教といい」(全一、464)、その教によりて割り出されるものが、天の「分」であるが、その分は「しばらくもはなるべからず、もしはなるときは、分にあらざり」といわれ、「分はしばらくもはなるべからずとは、日本国中の人民、鳥獸蟲魚にいたるまで、天地の命ずるところ、しばらくもはなるべからず、もしはなるときは、上下過不及を生じ、あるいは乱暴し、または飢渴に及び、国家おとろえ、田畑荒れ、ついに亡所となる、分はしばらくもはなるべからざるものなり」(全一、46、65-6)。かく分を守り性にしたがって力行するとき、「天道人道相和し、自然その身にそなわる」脱体现成天人合一の天性随順の道が報徳溯源道の基本路線となるのである。

ここでも天道を悟る「十分の悟」は、人道を根源的に基礎付け、治国安民食貨保全の実をあげるものでなくてはならないのである。上に掲げた中庸の章句を解釈するにあたり、尊徳は、性学または心学の立場とはおよそ対立的に次のごとく説いている。「天命之謂性とは、領主国家を安治せんと欲するときは、君公より命ずる領地、日月星辰の照し給わる御恵みをもって、百穀熟し、万民捧げ奉つる貢物なり。上一人より下諸民に至るまで、これを食し、これを飲み、これを衣て、身体を全くし、命を保つ、これすなわち「天命之謂性」というものなり。」「性に率うを道と謂う」とは、天の命ずる米穀、万民の捧げ奉つる一カ年の貢を以って、一カ年中、公務入用、家中扶助、窮民撫育し、饑えず寒えざれば、これすなわち「率性之謂道」というものなり。」「修道之謂教とは、天の命ずる米穀、万民捧げ奉つる一カ年の貢、豊凶の増減を改正なし、もって一カ年中、公務入用、家中扶助、窮民撫育に至るまで、過不足差支えなきように、和均するときは、これすなわち「修道之謂教」というものなり。」「道は須臾も離るべからず、離るべきは道にあらざり」とは、天の命ずる米穀、万民捧げ奉つる一カ年の年貢を以って、一カ年

中、公務入用、家中扶助、窮民撫育に至るまで、暫時も離るべからず。もし離るときは、道にあらず、故に自然と、上、困窮し、下、万民衰えるなり、田畑荒れ、領地ついに亡所となるものなり。これすなわち、「道者不可須臾離、可離非道」というものなり」（全一、463-4）。尊徳の理解する中庸の根本命題によれば、よく分度を守り、天の恵む米穀をもって万民の衣食住を全くして、天の命ずる性を生かすところに、天人合一・天性随順の道の動かせない使命があるのである。

天性随順の力行道は、もとより治国安民のみでなく、修身齊家的にも、欠くべからざるものである。秘稿下242に曰く、「恐れても恐るべきは、受財楽身。その身その身、天命あり。しかれば、自然に基づき候はかこれなきところ、あるいは借り、あるいは貰い、財を受けて身を楽しみ、終生涯の間、安楽に住むこと能わず。たとえば、田畑に肥しを持ち出し、途中にて酒のみ、田圃へ肥しせざれば、そのときは、体やすくして、楽ありといえども、<sup>(収穫)</sup>穫取の秋、実のり少し。また、勤めても、勤むべきは、施財苦身。寒暑を凌ぎ、酒食給するに、暇あらず。田圃へ肥せば、艱難を厭わず、穀物のために丹精を尽せば、万物その恵みに服し、悦びて生育し、秋に実のり多きこと、必せり。これをもって、これを観るに、陰徳積善を願う者、克己儉素を守り、財を施しては、恵みて費えず、その徳行、<sup>むらさき</sup>昌里に潤澤して、内外親睦す。艱苦勤行して、子孫栄ゆべし。語に曰う、『君子先難くして後得』と。かくのごとくして、天の命ずる性に随い、「日月星辰の御恵みを受け、万民草切り耕し、百穀熟する」ところ、人はその天性を全くするのみならず、進んで天地の化育を賛成する道を全くするのである。

### （三）化育賛成の道

農耕の道こそは天地の化育を賛成する道である。「鉞鎌の辞」に曰く、「庶人は農業をなすより大なることはなし。農業をなすに、鉞鎌より先なるはなし。しかれば鉞鎌は農をいとなむの重宝、民を救い国を安んずるの元、一日もなくてはかなわず。そもそも古を考うるに、我が朝、神代の昔、豊葦原を安国と治め給えしより、今日唯今にいたるまで、国を治め、家を<sup>とこ</sup>齊え、人命

を養う、これより尊きはなし。よく力を尽せば、天地の感応、目前に<sup>あわれ</sup>顯れ、米麦雜穀、湧き出し、金銀財宝、功德を照らす。故に食うも、呑むも、着るも、安楽自在なり。この鉞鎌をもって、農業をなすこと、片時もゆるがせにするべからず。この功德によらずして、ほかに富貴を願うべからず。

天津日の恵み積みおく無尽蔵

鉞でほり出せ鎌で刈りとれ

云々（全一三、814）、ここで開国のはじめより、「国を治め、家を齊え、人命を養う」「人ため」の道が「これより尊きはなし」と無上最高の道とせられているのは、この道が、「天は万物を恵みて形なきものなり」（全一、409）といわれるように、一円空にして一円仁の天の道の地上における天人合一的の実現であるからである。実に天の道が地上に実現せられるのは、かかる天に呼応して地が「地は万物を現して生育するものなり」（同上）という性格をもつからである。すなわち「万物を恵みて形なき」天の気をうけて、よくそれに呼応する地が「万物を現して生育する」からこそ、天地和合的に天の道は地上に実現せられるのである。「形なき」一円空にして「万物を恵む」天の道が「万物を現して生育する」地の道と天地和合的に呼応するところ、人よく「力を尽せば、天地の感応、目前に顯れ、米麦雜穀湧き出す」農業の道において、人は天地の化育そのものを直接に賛成する天人一貫のアイデンティティを享け得るのである。

実に鉞鎌による農耕の道は、絶対的創造的に天地の化育を<sup>おほ</sup>賛成、天人一貫的なアイデンティティを確立させる点で、世上の増減争奪による相対的消費的立場とは次元を異にするのである。夜話117に曰く、「世の中、とかく増減のことにつき、さわがしきこと多かれど、世上に云う増減というものは、たとえば水をいれたる器の<sup>(あちこち)</sup>彼方此方に傾くがごとし。あちら増せば、こちら減り、こちら増せば、<sup>(水そのもの)</sup>あちら減るのみ。水においては、増減あることなし。あちらに田地を買って悦べば、こちらに田地を売って歎く者あり。ただあちこちの違いあるのみ。本来、増減なし。予が歌に、「増減は器傾く水と見よ」と云える通りなり。それ我が道の尊む増殖の道は、それと異なり、直ちに<sup>あちこち</sup>天地の

化育を賛成するの大道にして、米五合にても、麦一升にても、芋一株にても、天つ神の積みおかせらるる無尽蔵より、鋤鎌の鎌をもって、この世上に取り出す大道なり。これを真の増殖の道と云う、尊むべし、務むべし。

天つ日の恵み積みおく無尽蔵

鋤でほり出せ鎌で刈り取れ

また「富家繁栄談」も、米穀を耕作するためのみに「一途に勤勞を尽せば、天地の恵み眼前に顕れ、」「身命を養うための国用、大徳地より湧き出で、家家を潤す天道の冥慮を恐れ慎み」天命の分度を守るよう説いている（全一、1029以下）。「一途に勤勞を尽せば、天地の恵み眼前に顕れる」のであるが、然らざるかぎりには、天地の感応はもとよりあり得ぬのである。夜話86に曰く、「古語に『富貴天にあり』といえるを誤解して、寝ていても、富貴が天より来るものと思う者あり、大いなる心得ちがいなり。『富貴天にあり』とは、己の所行、天理にかなうときは、求めずして富貴の来るをいうなり。誤解することなかれ。天理にかなうとは、一刻の間断なく、天道の循環するがごとく、日月の運動するが如く勤めてやまざるをいうなり。」ここにも天行健にして恵み讓る天の徳に報いるに、自強不息の人の徳を以てする、天人共感的以德報徳道が説かれている。ここにいたれば、天道は「広大無辺にして、人をしてよくその好むところに倚らしめ」とともに、また人は天地の化育を賛成し、「本来人道を發して天道を粧い」、「人道興りて天道を飾り」、「天地の化身」としてのその身が全き意味において「天の分身」そのものとなるのである。「それ元、天地は万物の父母なり。天地なくして、万物あるなし。万物は生民の父母なり。万物なくして、生民あるなし。故に生民は天地の化身なり。如何となれば、天地の間に生れ、天地の化物を喰べ、天地の間に長じて、天地の間に終る、この故に、天地の大恩を知らずんば、すなわち天地の間に立つべからず、天地の運動に順い、天地の化育を助けずんばあるべからず。如何となれば、飢えて食し、渴して呑み、寒うして衣る、この三者はみな天地の化物にして、しかも生民は一日これなければ、すなわち命を保つあたわざるなり」（全一、557-8）。まさに天地の化育を助

けることが、自他の身命を保つところに、人間の天人合一的な生き方があり、そこに天人一貫のアイデンティティも賦与せられるのである。

#### ㊦ 一心決定の道

ところで、天命あるを知り、その命ずる性に随う天命随性の道なるものは、もとより天道自然の流のままに就いて流れるといった行き方でもなければ、化育賛成の道も、天地無尽蔵の富が宝の小槌をふれば、すぐと転がりこむといった式のものでもないことはいままでもない。人はとかく自己の「人体より出たる僻道」に偏執し、驕慢放恣を事とし、天命に背反し、天地の化育を妨害するに至るのである。そこからいわゆる「一心決定」または「不動心」ということが重大な意味をもってくるのである。というのも、各人のあらゆる行動を統合し方向付け意味を与えるものが尊徳のいわゆる「一心」であるのに、その全人格統合の中心としての「一心」くらいぐらつき崩れやすいものはないからである。その点を尊徳は<sup>かみかき</sup>輕業師の芸当を例として次のごとく説いている。天保12年12月の相州成田村の小源治宛の書簡に曰く、「この頃、輕業を見しに、色々の物を積み重ねて、その上に人を乗せ、梯子に登り、諸人の目を驚かし、これを見るうちに、ふと心付き、我が身にも乗せたるものこれあり、先ず家内十人余、家屋敷・諸道具、または田畑山林・金銀・米穀少しながら借し付けてあり。右の<sup>（輕業師）</sup>曲持は一切にて息をもつくなり。『我は、命<sup>（ある？）</sup>あらぬ限り、持ち付けねばならず』と、父存命の時申し渡され、あぶなきことなり。しかれば、我が身持少しゆるむときは、乗せたるもの、みな崩れ落ちて、居所もなく、日々日雇取などして、世を送る者多く在々にこれあり候。恐るべきは、人々の心持ちなり。国は君、村は名主、家は亭主、この三つの心持ち、大切なり。歌に、

真実にまもる力の弱ければ

先ず我が身からもてぬ世の中

孔子も『我が道一をもってこれを貫く』とあり」（全六、939）。また天保10年2月、実弟三郎左衛門の家政取直書にも曰く、「実にその身一人一家を修むること、銘々預り居て、暫時も遁ること能わず、行住坐臥勤め行う所、

安きに似て、至って難し。これすなわち方法の根元なり」(全一六、525)。  
かかる見地から人格統合の中心としての「一心」の把持の重大性を説いてや  
まぬ尊徳は、利休の作といわれる一首、

寒熱の地獄にかよう茶柄杓も

心なければ苦しみもなし

をかかげ、秘稿上108において、次のごとく説いている。「それ富貴を好ん  
で、貧賤を悪み、勤勞を厭いて、安逸を欲するは、凡情の常なり。汝が兄七  
兵衛なども、養家へ帰るときは、夏ならば、火に入るがごとく、冬ならば水  
に入るがごとく、また生家へ来るときは、夏ならば、水に入るがごとく、冬  
ならば、火にあたるがごとく思うなるべし。然れども、その身その身に天命あ  
ることを知り、養家を大切にすべきの天理なることを悟り、心を尽し力を  
尽し、一途に勤むるときは、生家に来らんと欲するとも、暇あるべからず。  
かくのごとく励むときは、心力の勤勞も苦になるまじ、かえって楽しみなる  
べし、一心決定すればなり。然れば、苦樂は、心の有無によるべからず、一  
心決定にあり。それ農夫人は、寒暑風雨の日も、田に出、畑に出、穀物を作り  
出し、また車力は、(事を引く人)炎氣にも、(暑い日)車を押し、(米つきや)つきやの米をつくなど、その勤  
苦云うべからず、然れども、これを苦しみと見るは、外、慈悲の眼にて見れ  
ばなり。その身においては、勤苦をもって、寒暑をささえ、飲食をほしいま  
まにし、相助かり居るが故、かえってこれを楽しみとするなり。故に、人は  
天命あることを知りて、一心決定するを尊しとするなり。」まさに平坦々地  
寛裕溫柔の柔軟心をもって、天命随性の道を体し、壁立千仞発強剛毅の金剛  
心をもって、一心決定の道を貫くべきである。

この点をさらに追及し、利休の上掲の歌を改むべしとまで説くのは、夜話  
75である。「この歌、いまだ尽さず。如何となれば、その心、無心を尊ぶ  
といえども、人は無心なるのみにては、國家の用をなさず。それ心とは、我  
心のことなり。ただ我を去りしのみにては、未だ足らず、我を去りて、その  
上に、一心を決定し、毫末も心を動かさざるに至らざれば、尊むに足らず。  
故に我れつねに云う。この歌いまだ尽さずと。今、試みに詠み直さば、

茶柄杓のように心を定めなば

湯水の中も苦しみはなし

とせば、可ならんか。それ人は一心を決定し動かさざるを、尊むなり。それ  
富貴安逸を好み、貧賤勤勞を厭うは、凡情の常なり。犁・嫁たる者、養家に  
居るは、夏、火宅に居るがごとく、冬、寒野に出づるがごとく、また実家に  
来る時は、夏、氷室に入るがごとく、冬、火宅に寄るがごとく思いなるものな  
り。このとき、その身に天命あることを弁え、天命の安んずべき理を悟り、  
養家は我が家なりと決定し、心を動かさざること、不動尊の像のごとく、猛火  
背を焼くといえども、動かじと決定し、養家のために心力を尽すときは、実  
家へ来らんと欲するとも、その暇あらざるべし。かくのごとく励むときは、  
心力勤勞も苦にはならぬものなり。これただ我を去ると、一心の寛悟決定の  
徹底にあり。それ農夫の暑寒に、田畑を耕し、風雨に、山野を奔走する、車  
力の車を押し、米搗の米を搗くがごとく、他の慈眼をもって見るときは、そ  
の勤苦云うべからず、気の毒の至りなりといえども、その身においては、  
(ちやんと)兼ねて決定して、労働に安んずるなれば、苦には思わぬなり。武士の戦場に出  
て、野に伏し、山に伏し、君の馬前に命を捨つるも、一心決定すればこ  
そ、出来るなれ。されば、人は天命を弁え、天命に安んじ、我を去りて、一  
心決定して動かざるを尊しとなす。」

上に見たごとく、尊徳は秘稿108・夜話75において、「天命を弁え、天命に  
安んじ、我を去りて」一筋にその道に生きぬく「一心決定」の道を説くにあ  
たり、養子となる人の場合をあげている。そのケースを特に中心的に取り上  
げて、一心決定の道を説き、「難解の理」とするのは、夜話74である。嘉永  
3年10月、福住正兄が尊徳の門を辞し帰国せんとしたとき、64才の尊徳は、  
法華経方便品のいわゆる難解難入の智慧門に擬して、養子たる者の「一心決  
定の道」を次のごとく懇々と説いている。「二、三男に生るる者、他家の相  
続人となるは、すなわち天命なり。その身の天命にて、養家に行き、その養  
家の身代を多少増殖し度く願うは、これ人情にして、誰れにも見ゆる常の道  
理なり。このほかにまた一つ見え難き道理あり。他家を相続すべき道理に

て、他家へ往く、往くときは、その家に勤むべき業あり、これを勤むるは、天命通常の事なり。しかししてその上に、また一段骨を折り、一層心を尽し、養父母を安んずるよう、祖父母の氣に違わぬようにと、心を用い、力を尽すときは、養家において、氣が安まるとか、よく行きとどくとか、祖父母・父母の心に、安心の場ができて、養父母の歡心を得る。これ養子たる者の積徳の初なり。それ親を養うは、子たる者の常、頑夫といえども、野人といえども、養わざる者なし。その養ううちに、少しも能く父母の安心するように、氣に入るようにと、心力を尽すときは、父母安心して百事を任ずるに至る。これその身のこの上もなき徳なり。養子たる者の積徳の報いと云うべし。この理、凡人には見え難し。これを農業の上に譬うれば、米麦雑穀、何にても、肥は二度なし、草は三度取るとか、およそ定りはあれども、そのほかに一度も多く、肥をもち、草を去り、一途に作物の栄えのみを願い、作物のために尽すときは、その培養のために、作物思うままに栄ゆるなり。しかしして秋熟するにいたれば、願わずして、取り実俵数多く、自から家を潤すこと、知らず知らず疑いなきがごとし。この理は、人々家産を増殖したく思うと、同じ道理なれども、心ある者にあらざれば、解し難し。これいわゆる難解の理なり。」ここには、64年間一日のごとく、農耕体験を積み、報徳実践を重ねた尊徳の深く体得された「難解の理」が語られている。

また上にあげた夜話75において、「その心、無心を尊ぶといえども、人は無心なるのみにては、国家の用をなさず」として、茶人利休の道歌を改作した尊徳は、また、

笛吹かず太鼓たたかず獅子舞の

後足になる胸の安さよ

と詠んだ黄檗僧の茶人賣茶翁の歌を「人道の大害なり」ときめつけ、「賣茶はいわゆる賊なり」（秘下、372）とまで敢えて切言して、茶人利休・賣茶翁の「無心」中心の悟道的立場を痛烈に批判し、「我を去りて、その上に、一心を決定して、毫末も心を動かさざるに到りて」、現実の問題に取組む独立不羈の人道を力説し、「元、富貴貧賤は、天にあらざり、地にあらざり、また国

家にあらざり、銘々の一身にあり」（全二四、1074）とまで説くのである。かくのごとく批判せられる利休や賣茶翁に伍して、「無心ということ」が東洋の道の極致であると主張した鈴木大拙が、そのいわゆる「無心」の還相態とも云うべき、天人一貫的治国安民道に生きぬいた二宮尊徳の金剛不動心の場をつかみ得ぬままに、「無心」どころか、驕慢心そのものをさらけ出したのも、他愛なき人間喜劇的一幕というのほかはない（拙著『宗教的自覚と人間形成』515頁以下参照）。かくして、実に人間はその「我心」を去りて無心になった「その上に、一心を決定し」、「天地とともに行き、天地とともに勤め、天地とともに尽し」、「日月とともに輪廻すれば、昼夜なき」ままに生きぬく不動心に徹しなくてはならぬのである。かかる一心決定の道を通くものは、尊徳のいわゆる不動心である。

我欲の心を去り、一筋に天命の道を通くものは、金剛不壞の不動心である。「忠勤を尽して、その弊あるを知る」柔順寛裕の心をもって、「天命あることを知りて」、「一心を決定して、毫末も心を動かさざるに至る」を尊じた尊徳は、語録229において「不動の徳」を次のごとく説いている。「仏經にいわゆる不動尊は、何を謂うや。動かざるをもって尊しとなすなり。その像、火炎の中にあり。これ中心の慾情を顕わし、もって衆に示すなり。貴賤上下、家を喪い、国を亡ぼす者、炎々たる慾情の焼くところとなる。日夜炎々たる慾情の中に在りて、毅然として不動なるものは、不動の徳なり。能く不動の徳を修めば、すなわち何の家を喪い国を亡ぼすこと、これあらん。」

「不動の徳」の化身としての不動尊の像を床のかたわらに掛けてあるのを見て、山内総左衛門が尊徳に不動尊を信じるのかと聞いたところ、尊徳は次のごとく答えている。「予、壮年、小田原侯の命を受けて、野州物井に来る。人民離散、土地荒蕪、如何ともすべからず、よって功の成否に關せず、生涯この処を動かじと、決定す。たとえ事故出来、背に火の燃えつくがごときに立ちいたるとも、決して動かじと、死をもつて誓う。しかるに不動尊は「動かざれば、尊し」と訓ず。予、その名義と、猛火背を焚くといえども、動かざるの像形を信じ、この像を掛けて、その意を妻子に示す。不動仏、何



等(くどく)の功験あるを知らずといえども、予が今日にいたるは、不動心の堅固一つにあり。よって今日もなおこの像を掛けて、妻子にその意を示すなり」(夜話、50)。この一文が明確に示すごとく、尊徳は桜町就任以来一貫して不動心を把持していたのであって、ある論者がいとも簡単に論断するごとく、文政12年の成田山不動尊参籠祈誓によりてはじめて不動心を体得したのでは断じてない。成田山不動尊祈誓は、一円空にして一円仁の柔輭寛宏の心の体得によりて、不動心にまつわりつく意必固我の弊をいわゆる忠勤の弊として洗いおとし、本来の金剛不壊一心決定心として立体的に深化したのである(この点については、拙著『二宮尊徳の人間学的研究』増補版第七章第十節「金毛報徳の道」参照)。

成田山参籠後約15年にして、尊徳の門を辞して、相馬領宇多郡成田村・坪田村の仕法に当る高野丹吾に対して、下田の灯台の灯と見誤るように、岩上に火を焚きて、暴風雨中の船を誘い、難破させ、積荷を奪った悪党の例を引き、次のごとく夜話131で説いている。「我が仕法にも、またこれに似たる事あり。烏山の灯台は、(菅谷八郎右衛門)菅谷氏なり、細川家の灯台は、(中村親農衛)中村氏なるに、二氏(途中)の精神、半途に(立場)変じ、前の居処と違えるがために、二藩の仕法、目的を失い、今困難に陥れり。かりそめにも、人の師表たらん者、恐れざるべけんや、慎しまざるべけんや。貴藩のごときは、(草野正辰)草野氏・(池田胤直)池田氏のごとき大灯明、上にあれば、安心なりといえども、卿もまた成田・坪田二村のためには、大灯明なり。万一心を動かし、居処を移すがごときことあらば、二村の仕法の破れんこと、船の岩に当れるがごとし。されば、二村の盛衰安危、卿が一身にあり。よくよく感銘せらるべし。二村のため、卿がため、この上もなき大事なり。卿よくこの決心を定め、(不動尊)不動仏の、猛火背を焼くといえども、動かさざることならば、二村の成業においては、(ふくろの中)囊中の物を探ぐるよりも、安し。卿が心さえ動かざれば、村民は卿を目的となし、船頭の船路を見て、おも柁・取り柁と呼ぶがごとく、驕奢に流れぬよう、おも柁と呼んで、直し、遊惰に流れぬよう、取り柁と呼んで、漕ぐのみ。しかるときは、興国安民の宝船、卿が所有の成田丸・坪田丸は、成就の岸に安着せんこと、疑な

し。このとき君公の御悦びは、如何ばかりぞや。草野・池田の二氏の満足も、如何ばかりならんや。勤めよや、勤めよや。」まさに至誠純一の弟子に対する渾身至誠の垂訓である。単位を取り学位を得るときが、縁の切れ目という打算一本の今日の教育の場と天地の差である。尊徳はこのように一心決定の不動心を説いたのであるが、かかる不動心の窮極的師表として、彼が終始想起し仰いだのは、舜であった。世上勤儉貯蓄一辺倒と目せられる尊徳は、利害の打算をこえて、一心決定して一筋に天命に忠なる南面無為の道に生きぬくことを説くのである。朝には東に利を求め、夕には西に益を追うて一貫した操持のかけらもなきジャーナリスト的秀才とは、凡そ次元を異にした人間本来の面目に生きぬく道である。

#### (四) 南面無為の道

天の命ずる性に随い、一心決定してひたすらに「己が分を守りて、本業に力を尽して、他を顧みず」実徳を積む道を歩みぬく不動心に徹するとき、その道は舜の南面無為の道に帰一するのである。終生かわらぬ愛情ときびしい愛情とをもって臨んだ実弟三郎左衛門宛の仕法書において、天保10年2月、53才の尊徳は、論語衛靈公編の「無為にして治まる者は、それ舜なるか、それ何をか為さんや、己をうやまつ恭しくして、正しく南面するのみ」を引用して、次のごとく書いている。「これすなわち天子の天下国家を治めたまう大業なり。天子自ら勤め行い施したまう故、諸侯・大夫・士・庶人にいたるまで、天地の間に生育するもの、これを手本として勤め行ふべきの大道、片時も怠るべからず。もし怠る者は、衣食不足して、家内和せず、親族親しまず、困窮、艱難いたし、終に一家退転、滅亡するものなり。つねに大道を勤め行ふ者は、家内睦まじく、親族親しく、衣食住不足生ずることなし云々」(全一六、525-6)と説いている。

さらに嘉永3年10月、在塾4年にして帰国する福住正兄に対して、64才の尊徳は次のごとく説いている。「論語に大舜の政治を論じて、『己を恭しくして、正しく南面するのみ』とあり。汝、国に帰り、温泉宿を渡世とせば、また己を恭しくして、正しく温泉宿をするのみと読んで、生涯忘ることな

かれ。此のごとくせば、利益多からん。かよくなさば、利徳あらんなどと、世の流弊に流れて、本業の本理を誤るべからず。己を恭しくするとは、己が身の品行を敬んで、墮さざるを云う。その上に、また業務の本理を誤らず、正しく温泉宿をするのみ、正しく旅籠屋をするのみと、決定して、肝に銘ぜよ。この道理は、人々みな同じ。農家は己を恭しくして、正しく農業をするのみ。商家は己を恭しくして、正しく商法をするのみ。工人は己を恭しくして、正しく工事をするのみ。此のごとくなれば、必ず過なし。それ南面するのみとは、国政一途に心を傾けて、外事を思わず、外事をなさざるを云うなり。ただ南を向きて、坐しているということにあらず。この理、深遠なり。よくよく思考して、よく心得よ。身を修むるも、家を斉うるも、国を治むるも、この一つにあり。忘るることなかれ。怠ることなかれ。」(夜話、(論語衛靈公篇)76)。さらに秘稿105に曰く、「無為にして治むる者は、それ舜か。無為とは何ぞや。世人、何もせぬことと思ふは、誤れり。無為とは、己が分を守りて、本業に力を尽して他を顧みざるを、無為とはいうなり。舜天子となつて、すなわち己を恭しくして、正しく立ちて南面するのみ。天子は日月につかう。故に南面して、下万民を安撫することに日夜心力を尽したまうことを、無為にして治むるというなり。これ舜を称せしは、先づこの通り。この語、庶人に通ず。臣たる者は、君に忠を尽し、子たる者は、孝に止まり、士(各)農工商、みな己々が業を守り、必ず他を顧みず、これを無為にして治め、己を尽くして南面すというなり。もし子として、父と争い、士として工商の業をなし、酒屋として米屋にならんとする類、みな我が分を守らず、これを為すること有りというなり。」ブローカー的な政治家や官吏の輩は、この言葉何を聞かざらうか。

「天理を弁え、天命に随う」「南面無為の道を各階層についてつぶさに説くものは、語録184である。曰く、「孔子曰く、『無為にして治むる者は、それ舜なるか。それ何を為すや。己を恭しくして、正しく南面するのみ』と。何をか「無為」と謂うや。専ら天職を治めて、他を顧みざるのみ。何をか「己を恭しくして、正しく南面するのみ」と謂うや。天子は天徳を拝し、もつて

上帝に事う。故に南面するなり。百官は天子の命令を奉じ、以って天民を治む。故に北面なり。天子、天職を治め、百官、職役を奉じ、農夫、農耕を営み、(工商人)工商をなし、(かごかき)馬夫(馬子)その業を務め、(すべての人)擧皆、専ら力を己の職に尽す。これをこれ「無為にして治む」と謂うなり。叔世は、すなわち然らず。人君、臣職を兼ね、人臣、君位を僭し、(ねらい)士、商を兼ね、農、士を学び、(かじや)治工、(大工)木工を兼ね、(豆腐屋)米商、(くずや)酒商を学び、(後世)菽腐家、(中世)褐腐家を兼ね。これみな「己を恭しくして、正しく南面する」にあらざるなり。伝に曰く、『君子、その位に素して、行い、その外を願わず、患難に素しては、患難に行う。君子、入るとして自得せざるはなし』と。これ、「己を恭しくして、南面す」の語と(相照す)相對す。菽腐家はすなわち菽腐を製するを楽しみ、(相照す)馬夫、各々その業を楽しむ。これ「患難に素しては、患難に行う」ものなり。しかるに菽腐家、家業をもつて益なしとなし、褐腐家を欲す。これ、心志定まらざるなり。心志定まらざれば、すなわち、心と身、相離る。故に、家業をもつて患難となし、もつてこれを易えんと欲す。これ惑のはなはだしきものなり。菽腐家にして、その業を営むは、すなわち天命にして、その患難に安んずるは、すなわち天理なり。天理を弁え、天命に随い、心を安んじ、業を務む。これをこれ「己を恭しくして、正しく南面す」と謂う。孔子曰く、『巍巍乎たり、(論語泰伯篇)舜禹の天下を有つや、而して与からず』と。「与からず」と「己を恭しくす」と相對す。「与からず」とは、我が有となさざるなり。我が有となさざるは、己を恭しうするなり。舜禹、天下を有ちて、我が有となさざるは、これ巍巍乎と稱する所以なり。それ一人勤めて、一人食す、これ禽獸の道なり。一人稼穡して、もつて八口を養うは、人の道なり。一人勤めて八口を養い、余りあるを推して、もつて之を人に及ぼす。舜禹の与からずとは、それここにあり。与かりて我が有となす、故に足らず。与からずして、我が有となさず、故に余りあり。余ある、これを富と謂い、足らざる、これを貧と謂う。」(衛靈公篇)この章と呼応する秘稿上177に曰く、「論語に曰く、『無為にして治まる者は、それ舜なるか。それ何を為せるや。己を恭しくして、正しく南面せるのみ』と。天子は陽徳を拝す、故に南面す。百官は天子の命令を奉じて、万民

を治む、故に北面す。万民はまたこれを拝す、故に南面なり。無為とは、何ぞや。舜、天子の職を専らにして、他を顧みざるを称するなり。士農工商、その生れ得たる家業を専ら勤めて、他を求めざるを無為という。さて舜、無為にして何を為すとなれば、己を恭しくして、正しく南面して、天子の職を勤むるのみ。臣の無為は、正しく巨職を尽すのみ。農の無為は、正しく農業をなすのみ。工商、また正しく工商の業をなすのみ。駕かきは、正しく駕かきをなすのみ。馬方は正しく馬方をなすのみ。これを無為にして治まるといふなり。後世の弊は、然らず。天子として匹夫の行をなし、臣として君位を望み、農は士を羨み、工商もまた他に求む。たとえば、豆腐屋は、益うすき故、こんにゃく屋にならんとする念を起す。これみな、己を恭しくして南面するにあらず。語（中庸）に曰く、『患難に素しては、患難に行う』と。また曰く、『君子は入るとして自得せざることなし』といえり。これ、『己を恭しくして、正しく南面する』の語に相對す。豆腐屋に生るれば、豆腐屋を行くを樂しと思ひ、駕かき、馬ひきに生るれば、みなその業をなすを樂しむ。これ患難に素して、患難に行うなり。しかるを、豆腐屋に生れて、その業を無益と思ふ。これ己が心の定まらざるなり。身と心と連続せざる故に、家業をなすを患難と思ふ。いやしくも患難と思えば、これを遁れんことを思ふ。これ迷いのはなはだしきものなり。豆腐屋に生れて、その業をなすは、天命にして、患難するは、患難する筈と、安んずる。これ己を恭しくして、正しく南面するなり。語（論語泰伯篇）に曰く、『巍巍乎たり、舜禹の天下を有つや、而して与からず』といえり。これ与らずと己を恭しくすと相對す。与からずとは、我が物とせざるなり。我が物とせざるは、すなわち己を恭しくするなり。舜禹、天下を治めて、我が物とせず。これ求めずして、巍巍乎の稱ある所以なり云々。」この地上に享けた「仮りの身」を「元の主」としての天に「貸し渡し」、天の命に随ひ、その位と分に素して、「己の職を専らにして、他を顧みず」、「ここを先途として」、天人一貫的にこの一筋の道につながり、人道を發して天道を粧い飾ったのであったが、かかる一筋の道において、よく「天道人道相和し、その身にそなわる」ところ、「身と心と連

続する」心身一如の道が弓道に托して、小田原藩某氏に次のごとく示されている。「弓は己が気体のゆかけ（弓道の手袋）、片むかざる（はずみ）を打つ業なり。片むくときは、的に当らず、朝夕、食物の味すくなし、寝ごころ悪し。弓業怠らざれば、的に失わず、的に失わざれば、常の心樂し。常に心樂しければ、命長し。命長く、的に失わざれば、万事一時に成る。これすなわち天道なること、よくよく御精勤なざるべく候こと、專要と存じ奉り候。

木かけにも道のありける月夜かな云々」（遺稿五、41-2）。

#### （内）青天平歩の道

「身と心が連続し」「己の心が定まり」、よく晴雨一貫その境を正受し、その分に素して、南面無為の道を行くとき、時には晴天にして足取りも軽く進めるであろうし、時には雨天にして笠笠重く歩まねばならぬであろう。先づ前の場合から考えて見るであろう。この場合にも、人は「天地とともに行く」のである。天地の運行は、一昼一夜、一陽一陰、一暑一寒と交々現れる不止不転の行道そのものである。「天地開闢して以来、万代。年歳今に至るまで、昼夜の分ありて、その序を失わず、夜退けば、すなわち昼来り、昼退けば、すなわち夜来り、夜と昼と代序す（かわる）。夜重なり、昼重なりて、長く重なることは、いまだこれあらざるなり。昼長く重なれば、すなわち陰氣を失ひ、夜長く重なれば、すなわち陽氣を失う。陰陽和せずして、昼夜分たざれば、すなわち万物たちまち消滅す。昼の剛によりて、滅し、夜の弱によりて、滅す。これ天理にして、人力の及ぶところにあらず」（全一、354）。寒暑についても、同様である。昼夜・寒暑等における天地の一陰一陽的不止不転行道と軌を一にして、人間の生体の呼吸の作用も次のごとくいわれている。「天地開闢して以来、万代。年歳今に至るまで、生ある者、息を入れ、息を出し、その序を失わず、呼息止めば、吸息進み、吸息止めば、呼息進み、呼と吸と代序す。呼重なり、吸重なり、長く生きるものは、いまだこれあらざるなり。呼長く重なれば、すなわち吸息を失ひ、吸長く重なれば、呼息を失う。呼吸滞滯すれば、すなわち体疲れて、死亡す。呼の閉塞によって滅し、吸の開離によって滅す。これ天理にして、人力の及ぶところにあざるなり」

(井口『大二宮尊徳』336)。

また弘化元年改めの「身命保養自然談」にも、次のごとく説かれている。  
 「今ここに、ひとりの人民あり、呼吸して身命を保つといえども、一息づつ呼吸するより、先なるはなく、順なるはなし。呼く息、重ねて息することあたわず。吸う息、重ねて息することあたわず。もし止むことを得ずして、呼く息より呼く息(と)重ねて息するときは、はたして身体保ちがたく、また吸う息吸う息(と)重ねて息するときは、はたして身体保ちがたく、死亡すること、人みな銘々疑いなし。人生れてより今日只今にいたるまで、寿命の長短、生亡の遅速ありといえども、一息づつ呼吸するより先なるはなく、順なるはなし。これすなわち天理自然なりと知るべし」(全一、930)。この点は、飲食、昼夜の勤労・休眠、春夏秋冬の経営活動、寒暑の耕作栽培、播種作稲、播種作麦、播種作粟の各項についても、ほとんど同文にて示されている。

これらの身体作用に準じて、歩行作用についても、弘化元年改めの「開発動行談草稿」十項、「一株植付談草稿」十項、「一株刈取談草稿」十項と同じ趣旨内容をもつ「往来自然談草稿」において、次のごとく説かれている。  
 「今、ここにひとりのおのこありて、一里の道を往来せんと欲するとき、右足一步、左足一步づつ歩行するより、先なるはなく、順なるはなし。もし強者ありて、急ぐといえども、右足、右足と重ねて行くことあたわず、また左足左足と重ねて行くことあたわず。やむことを得ずして、右足右足と進み歩行するときは、身体はたして左へ倒る。また左足左足と進み歩行するときは、身体はたして右へ倒るること、一身生じ歩行はじまりてより今日唯今にいたるまで、人みな銘々疑いなし。歩行進退往返の遅速ありといえども、右足一步左足一步づつ進み歩行するより、速かなるはなく、順なるはなし。かくのごとくよく尽すときは、たとえ柔者といえども、その極にいたり得ざることなし。これすなわち天理自然なり。よくよくこの理を明弁いたし、そのほかを願わず、一途に相助み、往来いたし申したきことに候」(全一、986)。「一息引き、一息突き、また右一步左一步、一昼一夜、一寒一暑、

一天一地、本天地開闢より、万世に至るまで、寿長し」(全一、591)とあるごとく、天地・陰陽・寒暑・昼夜の不止不転の行道とリズムを共にし、右足が一步進むときは、左足は己を空しうして、己を右足に「貸し渡して」、そのすべてを右足に譲り、同様に左足が一步進むときは、右足が己のすべてを左足に「貸し渡し」、右足一步、左足一步と交々進む対偶一円の青天平歩の道は、天理自然にかなう「寿長き」天人一貫の道である。まさに天地陰陽の氣と和して、右足一步、左足一步刻々大地をふみしめて悠容迫らず進むところに、天地とともに行く青天平歩の道がある。天保13年11月の「利根川分れ路掘割見込書」に曰く、「右の足を進むときは、先づ左の足をふみしめ、左の足を進むときは、右の足をふみしめ候えば、たとい千里の遠きに往くといえども、安穩無事に往返いたし、さしつかえなき準繩、天然自然に人々に相備わり居り候えども、人情は進み過ぎてあやまち、また退き過ぎて片寄り過ぎること多し。とかく中道ならぬ身に病あり」(全二〇、706)。人はとかく「出ず入らず」の中庸を失し、出世街道を全力疾走して驕慢自大の弊に陥るか、隱遁生活に引き籠り白眼斜視の弊に止まるか、その何れかに走るを見て、尊徳は、右足一步左足一步、一進一退、一上一下、青天平歩の道に就かざるを得なかったのである。この天人一貫・対偶一円・青天平歩の道なるものは、単に人間の歩行のみならず、報徳仕法そのものをも貫く道であることは、弘化2年末、相馬仕法において第一に着手せられた成田村を範とする復興策実施のはじめに、尊徳が次のごとく説いていることから、明らかである。「成田を見よ、見て願わくば、直ちにこの道を下さん。庶民、またこれを見て、何ぞ興起して、歎願せざるものあらん。みな成田のごとき安楽村とならんと、心を安んじて願ひ求むる、必せり。このごとくにする、なお行かんとして、足を地に踏みつくるがごとし。一足踏みつけさえすれば、千里も勞せずして往くべし。千里に至る、一足踏み出して地に付くるにあり、一足きまれば、方里また同じ。これ、急というべく、早というべく、多というべく、強というべく、仁なり、義なり、礼なり、知なり、金剛界の大日なり、云々」(秘上、244)。まさに天地と陰陽の氣を共にし、右足一步左足

一步、よく万里を往きてかわらぬ天人一貫の青天平歩の道は、金剛界の大日とともに不止不転の一円行道において一もって貫くのである。その行道の初まるどころが、すでにその終るところと一円相において一つに結ばれて、万里の道は往還一如の一円行道なのである。すでに見て来たごとく、天保3年11月13日、上々天気の日<sup>(全三五、446)</sup>の日記には

始りも終りも一つ己が身も

一つのうちに一つ尊し

と詠まれ、さらに、

本元唯一、神人帰一

初能踏一、終必得一

とあり、本元唯一・神人帰一にして、天人一貫的となり、天地とともに行く青天平歩の道は、実に「初めよく一を踏めば、終必ず一を得る」一円行道として、始まりも終りも一となる円相をなすのである。始終よく「一を踏む」一円行道においては、最初の「一足きまれば、万里また同じ」といわれるごとく、その純粹無雑にして一円全き南面無為の発意・決心がすべてを決定し成就するのである。報徳秘稿上160に曰く、「<sup>(智圃文例集)</sup>庭訓往来、千万言の中、用をなすは、ただ一言のみ。曰く、『<sup>(注文がなくとも)</sup>注文に載せられずといえども、<sup>(おもちします)</sup>進し申すところなり』と。それ、進んで忠をつくすは、<sup>(退任し)</sup>注文のうちなり。退き、且つ過ちを補うは、注文にのせられずといえども、勤むるところなり。『馳馬も鞭打ち出づる田植かな。』馳馬は注文なり。注文に載せられずといえども、鞭打ち申すところなり。<sup>(旅人にそなえる脚)</sup>『影膳に蠅追う妻のみさおかな。』影膳は注文なり。蠅追うは、注文に載せられずといえども、勤むるところなり。(礼記に、子が問題の親に対し、『<sup>(おだやかにいさめる)</sup>微諫して倦まず、<sup>(親の心)</sup>勞して怨まず、孝と謂うべし』とあるが)微諫までは、注文のうちなり。志の従うまじきを見ては、敬して違わず、勞して怨みずは、注文に載せられずといえども、勤むるところなり。およそかくのごとくなれば、成就せざることなし。○なればなり。およそ物は○なし。されば、豆にても、粟にても、生ぜず。○にてさきあれば、何にても生ぜざることなし。故にかくのごとくなれば、成就せざる事なし。これ

孝弟の至りは、神明に通じ、至らざることなし。詩に曰く、『西より東より、南より北より、思として服せざることなし』というなり。これすなわち神書にいわゆる『なすところ願として成就せずということなし』ということなり。』

#### (4) 「忠勤の弊」

尊徳が天保の大饑饉を逸早く予想しその対策を説いた天保7年6月16日付けの横沢雄藏宛の書簡に、次のごとき一節がある。「<sup>(氣象)</sup>年柄はもちろん、人の<sup>(くらしむき)</sup>身の上、禍福吉凶、<sup>(陰陽の二つ)</sup>身代の盛衰、万事いちいち陰陽兩端合体いたさず、陰陰と重なるときも、陽陽と重なるときも、亡ぶ。たとえば、天地万歳を経るとも、寒暑増減なきことを<sup>(平和)</sup>天地静謐とよろこび、また百千万日を経る共昼夜増減なく、千里の道を行くといえども、右足一步左足一步、右足左足増減なきをもって、自在となす、天地の間、皆然り」(全三、408)。かかる天地陰陽の鉄則を無視し、あくまで陽陽と進む驕慢驕奢を恣にし、右足一步左足一步と足を大地につけて質実に進むことを厭い、一足飛びに序を超えて盲進するところに、尊徳が力をこめて説く「忠勤の弊」があるのである。

天保5年の秋に完成した「三才報徳金毛録」には、「忠信解」として(全一、37)、

忠勤を尽して、その弊を知らざれば、忠信に至らず

忠勤を尽して、その弊あるを知れば、必ず忠信に至る

とあるが、金毛録の完成とほぼ時を同じうして、桜町に来任した鶴沢作右衛門が筆録した「報徳教聞書」によれば、次のごとく「忠勤の弊」について説かれている。「世の中に文武器量人と云わるる人あり。その役、自然と頭れ、それぞれ分限に応じ、役々<sup>\*\*</sup>仰せつけられ候えば、忠勤も尽すようなれども、永役いたさず、退役いたす者、多く、如何いたし候ものや」という鶴沢の質問に対し、尊徳は次のように答えている。「器量人、働らきこれある人人、役柄<sup>(一筋)</sup>仰せつけられ候えば、各々初発は忠勤を尽し、御上の御為筋第一と心掛け、一<sup>(一筋)</sup>図に存じ込み候えども、その弊を知らず、一旦忠勤を尽し候のみにて、物毎に陽々と重り候故に、<sup>(転落)</sup>落ち転び生ずるものなり。世の中、陰陽陰

陽と歩まぬ故なり。その力は、役々仰せつけられ候えば、直ちに人より先に立つ故に、陽の場なり。その時は陰の場に心付け、勤め向きのほかは、暮し向きとて、これまでより引き去り、奢をはぶき、儉素をもちい、忠勤を上げむべきところ、その身を慢じ、我が器量にてかく人にも用いらると心得、我儘に宝を費す。御上よりは、先々代々官禄を下しおかれ候御高恩、その上にも、役々仰せつけられ候えば、御役料までも別段に頂戴いたし、その御恩徳報い候志いつか亡却いたし、不足の心根を生じ、築山泉水、茶湯、そのほか諸道具、家作、人々つきあいまでも奢り、いつとなく身分は垢染みこみ沢山に重り、数代(の)御高恩の方、等閑になり、公務に使うべき御役料を私用につかえ、たとえば酒屋にて酒を買い、その代料を豆腐屋などへ払うようなるものにて、世の脇目より見るときは、自然と道に違い、奢に長じ、初の志を忘るる故、わが親もみたる友にさえ、非をかぞえられ、終には自分として退役致す者多き替なり。

左足進めば、すなわち右足止まり、右足進めば、すなわち左足止まる  
 何事も己が歩行に似たりけり  
 左進めば右はとどまる  
 右足止めて左足行き、左足止めて右足行く  
 何事も己が歩みに似たりける  
 右ふみしめて左を行くなり  
 云々。」

この手記に呼応して、夜話82もまた次のごとく忠勤の道に寄生する驕奢の弊を説いている。「某藩の某氏、老臣たるとき、予、礼讓謙遜を勧めれども、用いず。後ついに退けらる。今や困乏甚しくして、今日を凌ぐべからず。それ、某氏は某藩衰廃危難の時にあたって、功あり。しかして今かくのごとく、窮せり。これただ登用せられたるときに、分限の内にせざる過のみ。それ官威盛んに、富有自在のときは、礼讓謙遜を尽し、官を退きて後は、遊樂驕奢たるも、害なし。しかるときは、一点の誹なく、人その官を妬まず、進んで、勤苦し、退きて、遊樂するは、昼勤めて、夜休息するがごと

く、進んでは、富有に任せて遊樂驕奢に耽り、退きて、節儉を勤むるは、たとえば昼休息して、夜勤苦するがごとし。進んで、遊樂すれば、人誰かこれらうらやまざらん、誰かこれを妬まざらん。それ雲助の重荷を負うは、酒食を恣まにせんがためなり。遊樂驕奢をなさんがために、国の重職に居るは、雲助等が為るところに遠からず。重職に居る者、雲助の為すところと同じくして、よく久安を保たんや。退けられたるは、当然にして、不幸にはあらざるべし。」まさに「行きあたるところまで行くべき」人道としての忠勤の道は、「己が住居をここに定めて、昼夜あり」といわれる自己中心的相対的な場において、特に「この昼」という陽に偏執することがことなく、一昼一夜、一陰一陽と不止不転的に「日月と俱に、輪廻して、昼夜の別なき」天人一貫の絶対的一円行道でなくてはならぬのである。

他人に先んじて昇進し、時めく陽の場に出るときは、一入かくあらしめた元の徳としての君公その他の恩徳に思いを致し、その徳に報いるべく、とくに自己自身の暮し向きという陰の場では、従来よりも一段と抑制し自粛して、右足一步前進すれば、左足一步ふみ止まり、昇進の陽と自粛の陰と陰陽交々、一揚一抑の中庸の道を進むべきなのに、出世して陽の場で時めくその上に、自分個人の生活という陰の場をも、庭園家屋調度など驕奢を極める陽の場とすれば、陽陽陽陽ということになり、昼夜交々の不止不転の天道に抗して、強引に「或る朝」「或る夜」に止まる(全一、477)非理をおかすのが、忠勤の弊という驕慢没落の行道である。その根底にとぐろを巻いているものは、「己が住居をここに定めて昼夜あり」といわれる自我中心の身体我である。

すなわち右足一步左足一步、一進一退、一陰一陽、一竜一蛇と緩急そのよろしきを得ず、一度拔擢せられて、権力の座につき、順風に帆を上げれば、意気陽陽と得意満面眼中人なく、長上の鼻息はうかがうが、人々の気持を察せず、長広舌は揮うが、人の言葉には耳を傾けず、陽陽と陽のみに止まり、陽を陰によって否定的に媒介する対偶一円性も、陽より陰へさらに陽より陰へという不止不転性も、共に喪失する天道疎外的偏向が、忠勤の弊である。こ

の点の典型的な事例は、報徳記巻五につぶさに記されている桜町仕法の協力者三幣又左衛門の辿った驕慢没落の経歴であり、また烏山仕法の中心人物菅谷八郎左衛門の浮沈の経緯である。前者の場合は、尊徳の「終身歎息する」ところであり、後者の場合は、尊徳が渾身の至誠を傾けてその忠勤をはばむ驕慢の弊を説きつくすところであった。(全六、576以下、拙著『二宮尊徳の人間学的研究』250以下参照)。身边に幾多の驕慢没落という忠勤に伴う弊を見て、尊徳は「忠を尽すといえども、罰あるを知らざれば、忠にあらず。忠を尽すといえども、罰あるを知らば、忠に至る」(全一、561)と書きとめざるを得なかつたのであった。この点では、今日も昔も同じような人間喜劇がくりかえされているのである。

これを要するに、右足一步左足一步、一陰一陽、一進一退と進むことを忘れて、陽陽と強行する驕慢驕奢に走るのは、人間として止まるべき分度を忘れ、人にして天を僭する傲慢僭越の妄行である。ここに易経にいう「亢龍に悔あり」の「忠勤の弊」がもし出されるのである。この点において世上の立身出世主義者は、尊徳のいわゆる分度恪守主義を笑殺して驕慢驕奢に耽り、やがて没落滅亡の淵に急ぐのである。分度を守り、分内に止まる篤実謙虚の生活に生きぬくか、分度を無し、分外に出る驕慢驕奢の日々を送るか、その両者の相違はやがて「千里の違い」を生ずるのである。この点に関し、昇進の榮に浴し、日の目を見た人に対して、尊徳は次のごとく夜話81で説いている。「矢野定直来りて、『僕、今日存じ寄らず、結構(昇進の辭令)の仰せを蒙り、有難し』と云えり。翁曰く、卿、今の一言を忘れざること、生涯一日の如くならば、ますます貴く、ますます富み、繁栄せんこと、疑あらず。卿が今日の心をもって分度と定めて、土台とし、この土台を踏み違えず、生涯を終らば、仁なり、忠なり、孝なり。その成るところ、計るべからず。大凡そ人々の事成りて、たちまち過つは、結構に仰せ付けられたるを、有り内(当りまえのこと)のことにして、その結構を土台として、踏み行方が故なり。その始めの違い、此のごとし。その末、千里の違いに至る、必然なり。人々の身代も、また同じ。分限の外に入る物を分内に入れずして、別に貯えおくときは、臨時物いり・不慮

(出費)の入用などに、差し支えろといふことは、なきものなり。また売買の道も、分外の利益を分外として、分内に入れざれば、分外の損失はなかるべし。分外の損といふは、分外の益を分内に入ればなり。故に、我が道は、分度を定むるをもって、大本とするは、これを以てなり。分度一たび定まらば、護施の徳功、勤めずして成るべし。卿、『今日存じ寄らず、結構に仰せ付けられ、有難し』との一言、生涯忘ることなかれ。これ予が卿のために懇祈するところなり。」

いずれにせよ、一たび日のあたるところに出ると、人は一陰一陽の理を無視して、陽陽と氣負い、驕慢驕奢を事とし、自己をかくあらしめた所以の徳など思いもせず、内外の反感を買い、ついに没落の淵に沈むのである。一步前進する毎に、一步反省して、自己をかくあらしめた所以の徳に思いを致し、その徳に報いる行として謙虚に忠勤をはげむものにして、真の忠勤である。「忠勤を尽して、報徳と思わば、忠に至る」(全一、561)といわれる所以である。

一步前進し得たときには、自ら努めるとともに、必ずかくあらしめた人々の徳に負うところがあるから、その徳に報いるために、謙虚誠実に忠勤をはげむことは、借財を返済すると同様に、当然の道理である。そこから「忠勤を尽して、道理と思わば、可なり」(同上)と云われるのである。

したがって忠勤を尽して、いつの間にか如何にもこの上もない善事をしたかのごとく自己陶醉に耽るならば、それは驕慢没落の方向に一步步み出したといわねばならない。そこから、「忠勤を尽して、至善と思わば、忠にあらず」(同上)といわれるのである。この点についての尊徳の洞察は、とくに犀利深刻である。すなわち本人自身が、誠心誠意忠勤を励んでいると、自ら許し確信し、それを「至善と思ひ」こんでいるところに、ちょうどその点に、獅子身中の虫さながらに「忠勤の弊」が宿り内攻するのである。かかる忠勤意識過剰の余り、性急にすぎたり、世話を焼き過ぎたりして、右足一步左足一步、一急一緩、一陰一陽の対偶一門の行道から外れて、一気呵成の強行軍にはしるために、自己自身の足もとが乱れて自己のアイデンティティが危

くなるとともに、自他の間の共感的関係も失われ、いわゆる人気<sup>（人気）</sup>が盛り上らず、その事業は成就しないのである。このことは、尊徳自身が桜町仕法10個年の前7年間に身をもってつぶさに体験した痛烈な人生体験であった。

#### (4) 陰徳長養の道

かくて天性に則して一心決定、南面無為にして青天平歩、右足一步左足一步行く道は、「初よく一を踏めば、終必ず一を得る」天人一貫のアイデンティティを享ける一円行道として、実に「万法の根元」である。溜らぬ愛情をそそいだ実弟三郎左衛門に、天保10年2月に切々と報徳の根本義を説いた「家政取直相続手段帳」に曰く、「実にその身一人一家を修むること、銘々預り居て、暫時も遷ることあたわず、行住坐臥、勤め行うところ、やすきに似て、至って難し、これすなわち万法の根元なり」（全一六、525）。まさに人は、一日一日、行住坐臥、右足一步左足一步天地とともに進む間、たえず徳を積み、自己を長養確立することが、「万法の根元」なのである。夜話残篇25に曰く、「若き者は、毎日よく勤めよ、これ我が身に徳を積むなり。怠りなまけるをもって得と思ふは、大なる誤なり。徳をつめば、天より恵みあること、眼前なり。」というも、内によく徳をつめば、必ず外に自づとあらわれるからである。同じく夜話残篇の33に曰く、「内に実ありて、外に顯わるるは、天理自然なり。内に実ありて、外に顯れざるの理、必ずなし。たとえば、日暮れに燈火を点ずるを見るべし。附木に火のつくやはや、障子に火の影はうつりて、外より家の内に燈火のあることの知らるるなり。そのほか、深山の花木、泥中の鱧は、自ら知らざるつもりにて、人は、早くもあの山に花咲きたり、この泥中に鱧の居ると知るなり、思わざるべけんや。」

また夜話21にも曰く、「それ何程草深き中にて、やまいもがあれば、人が直ちに見付けて、捨ててはおかず、また泥深き水中に潜伏する鰻・鱧もかならず人の見付けて捕える世の中なり。されば、内に誠ありて、外にあらわれぬ道理あるべからず。この道理をよく心得、身に瑕のなきように心がくべし。」また語録111に曰く、「松材を伐りて、これを市にひさげば、すなわち人必ずこれを買ひ、裁截してこれを用い、必ず良材といい、人をして称誉せ

しめて、やまず。願うに、その山林にあるの日、風雨を冒し寒暑を凌ぎ、歲月久しきに耐え、荊棘の中に生長す。これに艱苦を忍び、その材を成すにあらざや。人よろしくこの理を省み、艱に耐え苦を忍び、各々その職を勤め、もって良材の名をとるべきなり。」さらに、日々内外一如の誠の徳を積み、積めば、「天の恵」を享けて天人一貫のアイデンティティを長養し享受し得ることを、野菜果樹魚類等81種をあげて綿々と説く弘化2年改めの「報徳積善談草稿」に曰く、「今、ここに、青芋一百有余ありしとき、売り買ひ市人はもちろん、貴賤・老若・男女、これを得る者、これを食う者、人みな銘々、肌よく形丸く、大にして疵なきその徳を好み、善きを撰びて、これを取ること、疑なし。その根元を案ずるに、青芋いまだ市中に出でざるむかし、畑にありしとき、風雨を厭い、大暑を凌ぎ、生育して、昼夜精力を運び、実法熟せし陰徳による、これすなわち天道自然なり。徳の擽うべからざること、かくのごとし。よくよくこの理を明弁して、眼前の幸を得る者は、その徳を報ずべく、また後の幸を願う者は、いよいよ相励み勤め行い申したきことに候」（全一、993）。日々右足一步左足一步大地を踏みしめて進み、昼夜精力を運ぶ一筋の道においては、その内外一如の徳に天もよく感応し、「いわゆる積善の家には、必ず余慶あり、陰徳あれば陽報ありて」（語録、138）、よく天人一貫のゆるぎなき主体性を享け得るのである。

それだけに陰徳長養の道を忘れ、「我意を張り驕奢に募る」驕慢没落の道を辿る者に対しては、尊徳は仕法書においてくりかえしきびしく戒めている。天保11年1月14日付の小田原領藤曲村の仕法書に曰く、「易に曰く、『善、積まざれば、もって名を成すに足らず、悪、積まざれば、もって身滅ぼすに足らず。小人は、小善をもって益なしとなして、為さざるなり、小悪をもって傷うなしとなして、去らざるなり。故に悪積みて擽うべからず、罪大にして解くべからず』と謂えり。然るを自分より不運と名付け、何程身心を勞すといえども、その甲斐なしなどと、迷い至極の場に居て、悟道と極め、我意を押し張り、驕奢に募り、一倍二倍その幾倍に及んで、親先祖より譲り受けたる家株、田畑、居屋敷は、分散いたし、子孫永久に憂を残す者、間々これ



あり、浅ましきことならずや、この段堅く相慎しみ申したく候」(全一九、47-8)。実に陰徳長養の道こそは「万法の根元」として報徳溯源道の大動脈を成すものである。天地の不止不転の行道と軌を一にして天人一貫のアイデンティティを確立するとき、人は「自己自身への関係」を確乎としたものにし、天地の間に立つ「二間」的にして「唯我独尊」的な主体となるのである。

#### (4) 随時素行の道

かかる天人相貫の場が開けるのも、一方では、人間が一心決定・南面無為の道において「天の分身」としての我が身を天に奉還する報徳行に徹するが故であるとともに、他方では、天道自体が「天地広大無偏、年々歳々我が好むところに倚らしめ」、人道の主体的自由を容れる場であるからである。しかし、かかる天人相即の青天平歩・陰徳長養の道の日々は、いつも好日晴天とは限らず、時には曇天降雨の日もあるのである。その点について、秘稿下54に曰く、「雨降り来れば、帰りにて蓑(ま)を着て行くよりほかになし。また人の内(家)にかけこんでやますか。向うへ駆け行けば、如何ともすべからず。一年のうちにも、寒あり、暑あり。しからば、この仕法行ううちにも、変あるべし。たとえば、春陽に草木ことごとく青くなる節(季節)あり。また秋風には枯落す。故に、その変に達いて驚くべからず。沈思すべし。途中で雨降り来れば、帰りにて蓑を着て出づべし。」ここから「雨天なれば、雨天に随い、快晴なれば、快晴にもとづき人事をなすのほかなき」随時素行の道が力説せられるのである。

天保13年1月29日の窺新田平兵衛宛の書簡(全六、1068)に曰く、「天命、今朝は雨降りという。雨降れば、雨降るところ、すなわち天性自然なり。天性自然の雨降るに随いて、蓑笠(まがさ)を着用いたす、これを道という。この蓑笠はしばらくも離るべからず。離るときは、今日の道にあらず。今日の道にあらずして、蓑笠を着用いたさざれば、果たして濡る。濡れて難渋いたさざる者は、天下に少なし。——天命、今朝は快晴という。快晴なれば、快晴なるところ、すなわち天性自然なり。天性自然の快晴に随いて、農事をなす。これを道という。この農事をなすの道は、しばらくも離るべからず。離るる

ときは、今日の道にあらず。今日の道を勤めずして、農事に怠れば、果たして、その実法減ず。その実法減じて、困窮難渋いたさざる者は、天下に少なし。」まさに己を一円空にして、「元の主」の天に貸し渡す「貢ぎ縄」として、その時その時の境位に即して天地と行を共にし、よく自甞息むなき天人一貫の道において、天の分身としてのアイデンティティ(ゆるぎなき主体性)を確立するのである。

かかる天人一貫の「貢ぎ縄」の道を端的に示すものとして、尊徳が終始呈示したものは、中庸第14章の次の句である。「君子はその位に素して行い、その外を願わず。富貴に素しては、富貴に行い、貧賤に素しては、貧賤に行い、夷狄に素しては、夷狄に行い、患難に素しては、患難に行う。君子入るとして自得せざることなし。」この章句を随所に引く尊徳は、ことに報徳仕法書の完成と称せられている天保11年4月の駿河国藤曲村仕法書において、この章句と上掲の中庸第1章とをその核心として、患難に素して生きぬく道を次のごとく説いている。「天命当時患難なり。患難なれば、患難なるところ、すなわち天性自然なり。天性自然の患難に随って、天を恐れ、屈身いたし、言語を慎しみ、寒暖風雨雪霜を厭わず、または理非善悪の差別なく、終日終夜、勤苦いたす。これを道という。この患難の道は、しばらくも離るべからず。離るときは、患難の道にあらず。患難の道を勤めずして、患難の勤苦に怠れば、果して患難の道に背く。患難の道に背けば、患難の憂を免れず。患難の憂を免れずして、後悔せざるものは、(村里)邑里にすくなし」(全一九、27)。

しかも尊徳は、かかる患難に素して生きぬく道を重苦しい悲壮な道としないで、受容的積極的に受けとめて、上掲の中庸第10章の章句を前書として次のごとく詠んでいる(全一、889)ことは、注目に値する。

身を捨ててここを先途と勤むれば

貧しきことも知らで年経む

というのも、その時々々の明暗晴雨に素して生きる道は、天道と一上一下、一進一退、行を共にし、呼吸を合せて、天人交響的に生きる道であるからである。

「報徳教聞書」の一節に曰く、「機を織るにも、疊を織るにも、<sup>たて</sup>堅糸は、<sup>たて</sup>経なり。それに梭を入れ替え入れ替え織り行くなり。また日々日輪<sup>(太陽)</sup>の行道したまうも、東より西へ日を入れ、昼夜昼夜と織りたまうと同じことなり。右、<sup>たて</sup>堅糸はすなわち天地の道なり。それに随い、天道に背かぬように、生涯のうち、織りて暮せば、現世も後世も往生安楽疑いなし云々。」しかし、晴雨どころでなく、万物尽く凍みつくす極寒を思わせるほどに、天運非なる絶望的状况においては、如何なる道があるのであろうか。

#### (4) 隠忍退蔵の道

5才・16才の時の大洪水以来、何回もきびしい人生の試練の間に、ゆるぎなき自己自身への関係すなわちアイデンティティを確立した二宮尊徳であったが、彼のすべてを賭け全身身を傾けて、生涯最大の知己大久保忠真の知遇にこたえ、故国に報徳の大道を永久にとどめんとした小田原仕法が弘化2年に廃止になったときこそは、彼の70年の生涯中最もきびしい試練であった。この人生の嚴冬の極において、彼が語った言葉には、「元の主」の天に「仮りの身を貸し渡した」報徳人のゆるぎなきアイデンティティが端的に露呈している。この点は、報徳秘稿上104とほぼ同一内容を示す夜話60に曰く、「小田原藩にて、報徳仕法の儀は、良法には相違なしといえども、故障の次第あつて、<sup>(廃止する)</sup>今般疊み置くという布達出づ。領民のうち、これを憂いて、翁のもとに來り、歎く者あり。手作の芋をもち來りて呈せり。翁、論して曰く、それこの芋のごときは、国腹を養い、必用の美菜なれば、これを弘く植えて、その実のりを施さんと願うは、もつともなれども、天運冬に向い、雪霜降り、地の凍るを如何にせん。強いて植えなば、凍に損じ、霜に痛み、種をも失うに至るべし。是非もなきことなり。これ人の口腹を養う徳ある美物なるが故に、寒氣雪霜を凌ぐ力なし。食料にもならざる麩物は、かえつて寒氣雪霜にもいたまぬものなり。これ自然の勢、如何とも仕方なし。今日は、寒氣雪中なり。早く芋種は土中に埋め、藁にてかこい、深く納めて、來陽雪霜の消ゆるを待つべし。山谷原野一円、雪降り、水凍り、寒氣烈しきときは、もはやこれぎり暖かにはならぬかと思ふようなれども、雪消え、氷解けて、草木の

芽ばるときも、また必ずあるべし。そのときに至って、かこいおきし芋種を取り出し、植えるときは、たちまちその種、田圃に満ちて、繁茂する、疑いなし。かかる春陽に逢うとも、種を納め、かこわざれば、植え殖すことあたわず。それ農事は、春陽立ちかえり、草木芽立たんとするを見て、種を植え、秋風吹きすさみ、草木枯落するときは、未だ霜雪の降らざるに、芋種は、土中に埋めて、「ここに埋むる」という心覚えをし、深く隠して、來陽を待つべし。道の行わるる、行われざるは、天なり。人力をもって如何ともなし難し。<sup>(仕法廃止)</sup>この時にいたっては、才智も益なし。弁舌も益なし、勇あるもまた益なし。芋種を土中に埋むるに如かず。それ小田原の仕法は、<sup>(前藩主)</sup>先君の命によって開き、<sup>(現藩主)</sup>当君の命によって疊む。みなこれまでなり。およそ天地間の万物の生滅する、みな天地の令命による、私に生滅するにはあらず。春風に万物生じ、秋風に枯落する、みな天地の令命なり。あに私ならんや。曾子、死に臨んで、『予が手を開け、予が足を開け』云々といえり。<sup>(我)</sup>予もまた然り。予が日記を見よ、予が書翰留を見よ、戦々兢々、深淵に臨むがごとく、薄氷を踏むがごとし。曇みおきになって、予免るることを知るやというべし。汝等早く歸りて、芋種を囲いおき、來陽春暖を待つて、また植え弘むべし。決して心得違ひすることなかれ、慎めや、慎めや。」ここにも、安政2年の歳末の日記に記された曾子の語が引かれているが、この間斷腸の思いに熱涙をのんで陽氣に振舞う尊徳の肚裡に深く生きていたものは、「元の父母」としての天とともに生きぬく天人一貫の道の不滅性に対する金剛不壞の一心であった。まさしく「水急にして、月を流さず」の一境である(この点については、拙著『二宮尊徳の人間学的研究』275頁以下参照)。時運非にして道行われざる時も、「農夫の種をおさめて來陽を待つがごとくするを、君子の道というなり」と夜話60と内容を等しくする報徳秘稿上104は結ばれているが、君子の道は、受施・興廃・勝敗等、順逆・明暗・正變の何れにも与してかわらぬ点で、天道と軌を一にしている天人一貫の道である(全一、399-400)。

天運非にして万事絶望的な限界状況をも貫くものは、「元の主」に「仮りの身」を貸し渡し、日月と俱に輪廻して昼夜なき天人一貫の道である。ここ

でも、窮極的なものは、人よく天に我が身を貸し渡し、廣大無偏の天またよく人にその好むところに倚らしめる天人の相切的交流共感関係である。この点で、誠の道としての天とこれを誠にする人とは、切点的に同声相應じ同氣相求めるのである。この切点的交流があるが故に、一切が凍みつような限界状況にも、極微的に一陽來復を体感せしめる何ものかがあるのである。夜話168に曰く、「山谷は寒気に閉じて雪降り凍れども、柳の一芽開き初むるときは、山々の雪も、谷々の氷も、みなそれまでなり。また秋にいたり、桐の一葉落ち初むるときは、天下の青葉はまたそれまでなり。それ世界は自転して止まず。故に時に逢う者は、育ち、時に逢わざる者は、枯るるなり。午前は、東向きの家は、照れども、西向きの家は、蔭<sup>かげ</sup>り、午後は、西に向く物は、日に向け、東に向く物は、蔭<sup>かげ</sup>るなり。この理を知らざる者、惑<sup>まど</sup>うて、我不運なりといひ、世は末になれりなどと歎くは、誤なり。今、ここに幾万金の負債ありとも、何万町の荒蕪地ありとも、賢君あって、この道に寄るときは、憂うるに足らず、あに喜ばしからずや。たとひ何百万金の貯蓄あり、何万町の領地ありとも、暴君ありて、道を踏まず、これも不足、かれも不足と、驕奢慢心、増長に増長せば、消滅せんこと、秋葉の嵐に散乱するがごとし。恐れざるべけんや。予が歌に、

奥山は冬気に閉じて雪ふれど

ほころびにけり前の川柳

云々。」

ほぼ同じ趣旨を説く報徳秘稿上57に曰く、「それ、奥山は寒気に閉じて、雪降り、氷れども、川端の柳、一葉芽をひらくときは、もはや山の雪も谷の氷もみなむだとなりて溶けるのみなり。また秋にいたり、桐一葉落つときは、世界の青きものは、またむだとなるなり。世界は昼夜自転して止まず。故に時に向うものは育し、時にそむくものは枯る。昼前は、東に向うものは照り、西に向うものは、蔭<sup>かげ</sup>り、昼後は、西に向うものは照り、東に向うものは蔭<sup>かげ</sup>る。人々これを知らずして、あるいは運は悪いと云ひ、あるいは、世が末だと云う。これ誤なり。故に国に善人ありて、国を興さんと欲する者あれ

ば、幾千万兩の借財もみな返済成るべし。また一人不足と云う心あらば、幾千万兩の財宝も、また皆むだとなるべきなり。

奥山は冬気に閉じて雪ふれど

ほころびにけり前の川柳

云々。」

まさしく日月とともに輪廻する隠忍退蔵の道そのものである。天保12年12月成田村小源次宛の口演にも、次のごとく示されている。「我はその方こそ大君子と存ず。然れば衆民の源なり。その源にて、憂を灌<sup>そそ</sup>げば、その流きわめて憂う。その源にて、憂を灌<sup>そそ</sup>がざれば、その流清し。人の性は、大学に曰う明德とて、清きものなり。論語に曰く『富貴は天にあり。』人は、貧賤に暮すは、すなわち天命なり。衆役の罪にあらず、天の時なり。中庸に曰く、『貧賤に素しては、貧賤に行う。患難に素しては、患難に行う。君子入るとして、自得せざるはなし』とあり、恐れ多くも、御上御借財あるときは、民困窮するは、天命と存じ、なかなか人力の及ぶところにあらず。しかれども、春秋昼夜あるがごとし。今、その方言うごとく、<sup>(現在)</sup>當時、政不正はすなわち夜なれば、ただこの節は己を修めて、もって明日を待つに如かず。もはや明日というも、遠からず。東都紅葉山辺に日輪出て、日本に光明を放つこと、疑なし。これは我が国君なり。しかる且に住みながら、憂うるは、すなわち我が迷なり。日輪の行道を考えて、我が本業をなすに如かじ。日闌なれば、すなわち彼の雪霜消ゆるものなり」(全六、938)。夜の暗黒その極に達すれば、屋の光明が兆して来るのである。ここでも天道は人道の範るべき原型である。時運非の極なれば、春遠からじと肚をすえて、たじろかぬところ、まさに「負けて覚える角力かな」の否定的媒介の精神に徹する隠忍退蔵の道そのものである。

#### (四) 和而不流の道

上、天命に配し、天性に随い、晴雨その時に素し、時非常なるにも隠忍退蔵して、よく一以って貫き、如何なる否定的現実をも正受して、悠容迫らぬところ、「和して流れざる」中庸の徳としての「仁者の勇」が体现せられる

のである。実に「仁者の勇」は否定的媒介によってのみ実現せられる徳である。語録319に曰く、「孔子曰く、<sup>(論語憲問篇)</sup>『仁者は、必ず勇あり、勇ある者、必ずしも仁にあらず』と。財を積み富を得るは、難く、富を得て、これを保つも、また難し。分を知り、これを守るは、易く、分を守り、これを譲るも、また易し。その難きを為すものは、勇者の勇なり、人服せず。その易きを為す者は、仁者の勇なり、人服す。人服せずば、強しといえども、しかも事を成す能わず。人服せば、柔といえども、しかもよく事を為す。仁者の勇は、たとえ<sup>(なめしがわ)</sup>熟皮のごとく、和して強、故に衆<sup>(人々)と</sup>与す。勇者の勇は、たとえば鋼鉄のごとく、強にして和なし、故に衆とせず。然り而して、和する者、柔に流る。和して流れざるは、中庸の徳なり。それ熟皮は自然にあらず。あるいはこれを水に潰し、あるいはこれを日に曝し、あるいはこれを撃ち、これを揉み、然る後成る。人、学ばざれば、すなわち偏ならざる能わず、切瑳琢磨の功を積み、然る後中庸の徳成る云々。」

まさに「和して流れず」、相互共感性と自己同一性を相即的に兼ね具える「仁者の勇」なるものは、「中庸」に示されているごとく、富貴・貧賤・患難等々、正反こもごもその位に素して行うの間、幾重にも否定的媒介の切瑳琢磨の体験を重ねて、よく「自然の中」に住する天人一貫の「中庸の徳」である。

実に「和して流れざる」中庸の徳は、「自然にあらず」して、幾重にも「切瑳琢磨の功を積む」否定的媒介によって体得せられ体現せられるのである。ヘーゲルにおいて、精神の自覚とその自己実現を可能にするものが否定的媒介そのものであったことの限りなく深い意味が、二宮尊徳の場合にも生きているのである。尊徳がその農耕体験に訴えて「甚しく暑き年は、豊作なり。俗に『稲は照り草なり』と言う。暑さ甚しき年は、果して諸作物心よき故、豊年と申し伝い候えども、全く心得違いなり。諸作物、大難波なり。今日は命を失うや、今か今かと苦しむ。一生艱難に居り、丈も短く、日中甚しく故、夕方待ち兼ね、夜中専ら明日の扶食用意をなし、潤い集め、漸く一日づつ、相凌ぎ、一生艱難に居る。故に米穀沢山取る、人もまた然り」(全

一、554)と語るごとく、精神の自己実現の道は、幾重にも否定的媒介の切瑳琢磨の体験によってのみ成就するのである。ヘルマン・ヘッセが自伝的作品「デミアン」の序言で「一人一人の人間の人生は、自己自身に至る道である。……しかるに一人として全面的に自己自身になった者はない」とまで語った所以である。それだけに、幾重にも否定的媒介による「和して流れざる」中庸の徳の意味が思われるのである。

#### (四) 各器円成の道

かかる艱難に否定的に媒介せられる中庸の徳に現成する「自然の中」の場において、「天の分身」として「天より自然に下し給える人々」が「元の主」としての天の母胎に帰り、その焦点的中心としての「日輪の神徳」を享け、その「照すところ、白花ますます白く、赤花ますます赤くなる」ところ、各人は天人一貫のアイデンティティを実現し、「日月清明、風雨順時、五穀成就、万民和楽」と題して(全一、886)、

明月や鳥はからず驚はさぎ

月今宵草木もともに光りけん

さぎもからすも住処住処に

と詠まれ、また「天上天下唯我独尊」と題して、天保4年2月1日に(全一、879)、

天地の和して一輪福寿草

咲くやこの花幾世経るとも

とも詠まれるところ、今や「天より自然に下し給える人々」としての天民は、全き意味の「天の分身」そのものとして、「寿」の海の「元の水」を各各の器に即して満した各々円成の主体となるのである。かくて尊徳独自の仁の解釈を示す語録202に曰く、「孔子、仁を人に許すや、その徳に大小ありといえども、各々これを全うせば、すなわち仁となす。これを盥<sup>(わん)</sup>・磔<sup>(せつ)</sup>・杯<sup>(さい)</sup>・<sup>(小杯)</sup>瑗を盤上に列置し、もって雨水を受くるにたとう。盥・磔・杯・瑗、大小ありといえども、雨水全くその器に満つれば、すなわち仁となす、もしそれ大器といえども、全く満たざれば、すなわち仁にあらざるなり。」もともと才

あるを器といい、徳の充つるを量というところから、器量とは才の器に徳を充たすことを意味するといわれているが、今や大小とりどりの各人の「仮りの身」の器が「元の主」に貸し渡され、「元の水」という天の徳をもって充されて、全き意味の「天の分身」として各々円成のアイデンティティを現ざるところ、同類相応じ、同気相求める互撰互融の共感性の場が開けるのである。

#### (四) 一器水平の場

それでは、各器円成の場が同気相求める共感性の場と一如になるのは、如何なる地平であろうか。それは、すでにのべた「元の水」の場である。「本来、水に赤黒なし。朱にせがまれて、赤くなり、黒にせがまれて黒くなるなり」(秘上、67)といわれ、「酢・醬油・酒、いずれも、その元は、水なり。酢は酢とばかり心得居る故、酢というにごりにひきかかり、元の水が見えぬ」(見聞記、13)といわれる「元の水」は、一切の特殊的個別的限定をこえた「天」、「寿」、「天地不書の経文」の地平をあらゆる普遍的根源的な場を意味する。すなわち紅屋の排水口では、赤くなり、紺屋の排水口では、紺色となるが、元の水にかえれば、無色透明の水あるのみである。また水はその容器が傾くと、あちらに増し、こちらに減る増減の波の起伏が見られるが、その容器が動かなければ、「元の水」は、波の大小起伏をこえて「自然の中」を現成し、不増不減・不偏不党・無色透明・一器水平の場に住している。尊徳は、村々の検地帳が「水帳」と呼ばれていることに関して、「水は平なるに治まり、平ならざるに乱れ、自ら均平の徳あり」(語録、120)としているが、弘化元年改めの「一器水動不増不減鏡」においても次のごとく説いている。「器傾いて水増減なきことあたわず。これに減ずるときは、彼に増し、彼に減ずるときは、これに増す。つらつらその根元を案ずるに、半器に居住するものは、常に増減あって、止むことなし。一器に居住するものは、さらに増減なし。本来、増減我が居住にあり、これこれを天理自然なりと知るべし」(全一、640)。

さらに語録50には、次のごとく端的に説かれている。「天下の物水より、

平なるなし。今、それ千石百戸の邑、均しくこれを分てば、すなわち一戸十石なり。これすなわち天分なり。なお水の平らなるがごとし。しかしてその十五石を有つ者を大となし、<sup>(富者)</sup>富となす。これなお水上に出るがごときなり。その五石を有つ者を小となし、貧となす。これなお水中に没するがごときなり。天分十石の邑に居て、五石を増し、もって水上に出て楽しむは、何ぞや。五石を減じ、もって水中に没して苦しむ者あるが故なり。大小貧富固と団体なり。よろしく同体の理を弁じ、富者は余財を推し、貧者を恤れみ、貧者は余力を勤め、その恩に報ゆべし。それかくのごとくんば、すなわち大小貧富その均平を得て、俱に水面に浮び、もってその生を楽しむべし、これ国家治安の本なり。」「元の水」の一器水平の天分の場は、また報徳見聞記59においては、左右前後に動く自在かぎを例として、次のように説かれている。「自在かぎ、前にひいてはなすと、止まるところ、天理自然なり。これを『上天のことは、<sup>(中册33章)</sup>声もなく臭もなし、いたれるかな』というも、これなり。」すなわち無声無臭の「天地不書の経文」(夜話、1)に示される「自然の中」としての天分に各自が住して、「大小貧富その均平を得て、俱に水面に浮び」、「大小貧富も同体の理」を実現する一視同仁四海兄弟の絶対水平軸の「元の水」の場においては、各人が青色青光赤色赤光よく各々円成のアイデンティティを確立するとともに、相互に同類相応同気相求よく互撰互融のエンパシーを享受し得て、よく人道を発して天道を粧い、「娑婆即寂光浄土」の風光を現するのである。

天保7年7月25日、酒をやめ粥を用いて、庶民と同じ水準の生活に入った横沢雄蔵に宛てた書簡において、50才の尊徳は次のごとく書いている。「富また限りなき御身分にて、御禁酒、その上日々に粥お用いなされ候御仁心を学び候えば、無位卑賤の者は、終に卑賤を知り申すべく候。卑賤は卑賤を知り、貧賤は貧賤を知り、互いにその身その身立つ所を知るときは、天より自然に下し給える人々なれば、娑婆即寂光浄土なり。その身その身の在るところを楽しむときは、恵まずして、国富み、奪わずして、財足り、欲せずして豊なり。これすなわち国土安穩の政事、令せずして行われ申すべく候云々」

(全六、86)。最下層の人々も「天より自然に下し給える人々」としてひとしく「互いにその身その身の立つところを知り」、「その身その身の在るところを楽しむ」「娑婆即寂光浄土」においては、その大小とりどりの器に「元の水」を十全に満して各々円成のアイデンティティを天人合一的に確立するとともに、「大小貧富その均平を得て、俱に水面に浮び、もってその生を楽しむ」。

## 天竺咄

種々重罪、五逆消滅、 自他平等、即心成仏。  
南無阿弥陀仏、 南無阿弥陀仏。

## 日本咄

種々貸借、元利消滅、 自他平等、即心皆済。  
東西南北天地神、 東西南北天地人。

の場を現成し(全一、576-7)、よく「大小貧富同体なる」「同体の理を弁じ」、互換互融共悦両全の天人一貫的エンパシーを体感し得て、各自は「元の水」という天の地平圏において「天の分身」として「同根同体の道」を歩むのである。

## (乙) 天人一貫的共感性への道

## (一) 同根同体の道

かくて人間はひとしく「天の分身」として一人一人天上天下唯我独尊の主体であるとともに、ひとしく「天より自然に下し給える人々」として「元の水」の場に水平に浮ぶべき「同根同体」の存在である。尊徳の生涯を貫く人間観は同根同体主義であると云われるほど、その根は深く、つとに一家の再興に全力を傾けていた時ですら、19才にしてひとり自家のみならず、本家の再興をめざし、本家の屋敷跡の竹林に垣根を結んで、その事業の出発点としたのであったが、嘉永7年3月に成った本家再興仕法書に曰く、「後年よりこれを見れば、本家末家の別ありといえども、その本をかえりみるときは、同根同体の儀、この故に、本家の憂いは、末家にて力をつくし、補助いた

し、末家艱難に迫るときは、本家よりこれを救助いたし、相互に助け合い、一身の全きことを願うがごとくならば、本末永々退転いたし候憂い、これあるまじく候云々」(全一六、416)。この段階の同根同体の道は本家分家一体主義ともいわれるものである。

これにつぐものは、嘉永3年11月の信州神津家の仕法書に示されている親族一体主義であり(全二一、115)、さらには一村一体主義である。語録54に曰く、「木、傷つけば、すなわち木中の水液輻輳し、もってこれを愈す。然らざれば、すなわち傷口腐蝕し、木の心ために朽ち、ついに枯稿す。一家の負債におけるも、また然り。すべからく挙家親戚心を協(あわせ)い、力を戮あせ、もってその債を償うべし。しからざれば、すなわち利息倍(二倍五倍)蕪し、一家ために斃たる。一村の貧戸におけるも、また然り。すべからく閭村聚議(村をあげて)し、もってその貧を振すうべし。然らざれば、すなわち一戸斃れて、戸口減じ、田畑荒蕪し、ついに一村の患となる。察せざるべけんや。」秘稿下243も、同一趣旨を説いている。

かかる「一家を思う心をもって一村を思う」一村一体主義は、村々相互間にも生かされ、相模国足柄郡大井村仕法書にいわゆる「村柄御取直し御趣法については、他村と相心得え居り候儀は毛頭ござなく、一村同様の儀」(全一八、115)なのである。かかる村々一体主義は、ついに四海一家主義ともなるのである。語録396に曰く、「それこの道盛なれば、すなわち国家富み、この道衰えれば、すなわち国家貧す。曰く、何をか道という。人道、これなり。曰く、何をか人道という。相生じ、相養い、相救い、相助く、これなり。故に、古の明君、民と体を一にし、歓楽を同じうし、憂苦を共にす。民、その徳に化し、相生じ、相養い、相救い、相助くるの道、盛んなり。故に、才は不才を養い、能は不能をあわれみ、貴は賤を恤み、富は貧を賑わし、貧富相和し、有無相通じ、四海一家のごとく、然り云々。」この四海一家主義の精神は、また富田高慶の慶応年間の相馬藩当局上申書に次のごとくべられている。「二宮先師の教えるところ、およそ国家の安危存亡は、民心を得ると失うとの二つにこれあり。かつ天の民における、自他の差別な

く、天の愛するところ、同一につき、もし御領民御撫育の御余沢ご候ときは、他領の民といえども、御恵みあそばされべく、云々」(佐藤太平『富田高慶』206)。まさに四海一家主義は、「天の分身」としての人に対する天の愛にもとづく天人合一的同根同体主義であるといわれるのである。

#### (二) 共感両全の道

かくして「天の分身」として「天の自然に下し給える人々」は、本来的根源的には同根同体なのであるが、現実的日常的には、「天の分身」としての「仮りの身」は、自他对立的である。その間にあって本来の相互共感的同根同体性を典型的に示すものとして、「両全完全の道」とせられるものは、天地・親子・夫婦・農業という四つの道である。

夜話42の冒頭に曰く、「世界中、法則とすべきものは、天地の道と親子の道と夫婦の道と農業の道との四つなり。この道は、誠に両全完全のものなり。百事この四つを法とすれば誤なし。予が歌に、

おのが子を恵む心を法とせば

学ばずとても道に到らん

と詠めるは、この心なり云々。」ここで尊徳が君臣の道をあげないで、親子の道をあげていることは、中江藤樹が一切の人倫の道の窮極の原型的なるものとして孝の道を説いていることと並んで、封建時代の思想家として異教の行き方として注目に値するであろう。

この四つの道のうちで原型的位置を占めるものは、天地の道である。「それ人は天地の間に生育し、天地の間に住むは、天地の令命にして、背くべき理あらんや。四季順にして、寒暑変化、年々豊凶、順なる者は、忠孝慈愛、その中にあり、終に榮え長久なり。背く者は、悛邪悪凶、その中にあり、終に亡び、長く断絶す」(全一、577)。すなわち何等かの意味で天地の道に背くものは、亡び、天地の道に就くものは、榮えるのである。というのも、天地の道は人間ならびに万物の生成原理であるからである。語録446に曰く、「天地、陰陽を合し、もって万物を生ず。人類・禽獸・蟲魚、男女を合し、もって子を生む。ひとり草木根を地中に生じ、幹を空中に発し、根幹を合し

て、種子を生む。一種、二を具す。故にこれを植えれば、すなわち生ず。これまた陰陽の理に合するなり。君民・貧富もまた然り。合すれば、すなわち生じ、財、日に優して、國、治まる。」

「天地、陰陽を合して、万物を生む」といわれる天道の生成原理をふまえて、天人一貫的両全全樂的な人道が、上掲の夜話42の引用文につづけて、次のごとく説かれるのである。「それ天は生々の徳を下し、地はこれを受けて發生し、親は子を育して、損益を忘れ、ひたすら生長を楽しみ、子は育せられて、父母を慕う。夫婦の間、また相互に相樂んで、子孫相統す。農夫、勤勞して植物の繁榮を楽しみ、草木また欣々として繁茂す。みな相共に苦情なく、悦喜の情のみ。さてこの道に法をとるときは、商法は売りに悦び、買って悦ぶようにすべし。売りに悦び、買って喜ばざるは、道にあらず。買いて喜び、売りに悦ばざるも、道にあらず。貸借の道も、また同じ。借りて、喜び、貸して喜ぶようにすべし。借りて喜び、貸して悦ばざるは、道にあらず。貸して悦び、借りて喜ばざるは、道にあらず。百事、かくのごとし。それ我が教はこれを法とす。故に天地生々の心を心とし、親子と夫婦との情にもとづき、損益を度外におき、国民の潤助と土地の興復とを楽しむなり」(夜話、42)。「天地生々の心を心とし」、「二つの気の和して一輪福寿草、幾代へるとも咲くやこの花」(天保4年2月1日、全一、504)と詠まれる天人一貫・同氣相求・共感相即の道として、天地の道・親子の道・夫婦の道・農業の道があげられるのである。

かくのごとくして、「天地の道と父子の道と夫婦の道と天性自然なり」(秘上、165)とせられるところ、先づ父子の道については、語録197に曰く、「孔子曰く、『父子の道は、天性なり。』今それ全き紙を扯裂して二となし、その一をもって、天下をめぐるも、必ずこれに会うものあるなし、その一のほか、作為をもって、これに合わずあたわず。これをこれ天性という。」子はどれほど大切に思う物でも母にあずけて更に疑念をさしはさまないし(夜話、134)、親は我が子が無頼の子になっても、養育費を出さぬということはない(夜話、10)、また「人の子たる者、はなはだ不孝なりといえども、も

し他人その親をそしるときは、必ず怒るものなり。これ父子の道、天性なるが故に怒るなり、詩に曰く、『汝の祖を思うことなからんや』といえり、うべなり」（夜話、184）といわれている。まさに親子は、その天性自然の共感的結合よりして、互いに己のすべてを貸し渡す」ところに、それを法とすれば、「学ばすとも、道にいたり」、天人一貫の道となる所以があるのである。

天地の道・親子の道についてあげられる夫婦の道も、道話16に「男女の情と父母の情ばかりは、天然なり」とあるごとく、それは天性自然の道である。この点では、成田山参籠の翌年、報徳仕法と報徳哲学のみのりがいよいよ豊かさを加えつつあった天保元年の日記において、8月17日の項に、「一円（御法）にみのり正しき月夜かな」（全三五、406）とあるとともに、9月1日・15日・18日・21日・26日の項に「夜天地和合あそばされ候」（全三五、409以下）とあることが想起されるのであるが、弘化2年の烏山領上境村の「難村取直縄索日掛趣談帳」にも「天地色道の道」が次のごとく説かれている。「日夜に限らず、日月の行道、お照らしなされ候ことは、恐れて恐るべし。故に、諸国五穀万物生ず。これに基づき、万民は天地の令命にあり。故に（大学）『（大学の道は）明德を明かにするにあり、民を親あはににするにあり、至善に止まるにあり。』しかして命を繋ぎ、男女の交りを致し、己れ己れの諸業、専らに相勤め、子孫の道、仕来りなり。右の趣、天道人道合体なり」（全二四、1074）。「天地の令命」にもとづき、「天より自然に下したまえる人々」としての万民が「男女の交りを致し」、子孫相統の道を全くすることは、「天道人道合体」の道として、まさしく「天地色道の道」といわれ、「天地和合」の道として祝福されるのであるが、というのも、本来的に、「体、男なれば、氣、女を含み、体、女なれば、氣、男を含む」（全一、409）といわれ、窮極的には「男、至誠なれば、すなわち女氣を含み、女、至誠なれば、すなわち男氣を含む」（桜町陣屋杉戸）からである。

かかる天人一貫の共感性を基本構造とする共悦全楽の道は、上に引かれた夜話42においてすでに見たごとく、「百事、この四つ（天地・親子・夫婦・

農業の道）を法とすれば、誤なし」といわれる人道の典型である。そこから、「商法は、売って喜び、買って悦ぶようにすべし」といわれ、貸借関係も「借りて喜び、貸して喜ぶようにすべし」というたてまえよりして、「恵んで費えざる上に、また欲して貧らざるの法」として報徳金助貸法も設けられたが、これこそ「貸借両全の道」であるといわれる云々と夜話175は説いているが、これらの事柄を要約的にのべているのは、「富は貧を孕み、貧は富を生む」と題して「天地色道の道」を説く見聞記66である。曰く、「君子は動かずして成り、小人ははたらきて生む。みな同じ。陽は天なり、男なり。陰は女なり、地なり。世界・うむもの、（万物）これに帰す。天下の財貨をつくるは、富なり。貧は富を生むなり。天地相和して、万物を産む。男女相和して、子を生ず。貧富相和して、財宝を生ず。みな相和して楽しむが、天地色道の道なり。天地、楽をはなるときは、（相和して楽しまなくなると）雨・雨とかさなり、（陰 陽）ひでり・ひでりとかさなるがごとし。金銭を借るときは、（利子がつく）利がくう。貸す人、利をとりて楽とす、借る人をつぶすに同じ。これ前にいう、陰陰とかさなり、陽陽とかさなる、同じ理なり。われらは人を助くるをもって、楽とするなり。故に、金を貸すに、無利息年賦にして貸す。借る者、これにて助かる。貸す方も、自然助かる。楽しみの最上、すなわち陰陽相和す理なり。金銭を無理にこしらえても、長もちはなきぞ。自然でなければ、長くならず。」

かくして自他ともに青色青光赤色赤光、各々円成の仁に住する天人一貫のアイデンティティをもって、互擬互融的に共感するところ、同根同体・共感両全の地平圏は親子・夫婦の家族圏をこえて、貸借・売買等の人間関係にも及んだのであるが、一円空にして一円仁、「仮りの身を元の主に貸し渡し、民安かれと祈る」「人ため」中心の報徳仕法そのものにおいては、その共感的地平圏は、天人一貫的にその共同体全体に浸透するものとして本来の意味の「人氣」そのものではなくてはならないのである。

#### （四）「人氣相進む」自他共感性の道

もともと人々の生活を建て直す報徳仕法は、一人で打って舞う一人芝居でなくて、人々とともに力を協せ呼吸を合せる共同事業である。人々と呼吸が



合い気が合う「人気」なしに、その事業は到底成就しない。このことは、「ヘラクレス的活動」をした民衆指導者二宮尊徳が、その骨髓に徹して体得したところである。尊徳くらい全き意味の「人気」の本質をつかんでいた歴史的人物は、稀である。

尊徳のいわゆる人気なるものは、世上の人気歌手とかスター・プレーヤーとか流行作家とかベストセラー的ジャーナリストにたまたま寄せられる熱し易く醒め易い一時的熱狂的泡沫感情でもなく、ル・ボンが鮮かにその正体をあばいた群集心理に属する非合理的感情とも次元を異にし、その根底を超越的なる天に仰ぎ、その現成を大地に即した質実なる長期建設的実践に須つものとして、まさに「上、天命に配し、下、人心に合す」るものが、尊徳のいわゆる「人気」である。

上下貧富の対立のきびしい幕末封建社会にあって、藩政側からは、「野州理屈」、「三十年理屈」とその立場を白眼視せられ、たえずその失脚を狙われ、下民の側からは、「なにしろ無性に働らきさえすれば、いいんで!」という一知半解の声があるとともに、「うわむきは柳と見せて世の中は、蟹の歩みの人ごころ憂き」(全三五、340)というような陰険な反撥をうける上下挾撃の間、「私一人相残り、夏の虫の火に入るごとく、前後の勘弁もなく相勤めて」、「人ため」の道貫いた尊徳としては、その業成るに及んで、「天なる哉、時至り候哉、案外人気相進み云々」と繰り返し書かざるを得なかったのである。それが吐の底からの述懐であったことは、ギリシャ七賢人の一人ソロンが、貧富のきびしく険しい対立の間に、中庸的立場よりして、アテナイの政治改革に百方努力した後、ついに国外に退去する際、「大事を為すにあたっては、万人の氣に在ること難し」と述懐せざるを得なかったことと思ひ合わされて、深い感慨を誘うのである。ソロンの述懐に対比するとき、「天なる哉、時至り候哉」という尊徳の述懐のもつ重みが思われるであろう。

それだけに「人ため」の徳に発する「人気」をおこすことに力をそそいだ尊徳は、「国を興すは、人気を進むるにあり。人気を進むるには、直を挙げ善

を賞せざれば、進まず」(秘上、51)として、投票による善人表彰法を施行するとともに、率先垂範自発自励をもって自づと周囲に波及する共感的円環の中心的動源となり、人気を進めようとしたのであった。秘稿上237に曰く、「衰村怠惰の人氣を興す、難きかな。この道を下し、日夜回村すといえども、容易に人気おこらず。〃御仕法か!〃、〃また御廻村か!〃など称して、速かに人気興らざる、自然の道なり。然りといえども、誠信をもって、ものいわずして日夜回村し、善を称し、貧を恵めば、至誠神に感じ、何ぞ人心興起せざらんや。これを棒をもって(たらいの水)盤水を回らすにたとう。棒をもって盤水を回らす。はじめのうちは、棒と水と別にして、水なかなか廻らず。しかりといえども、怠らず倦まず、棒を回るときは、水自然に回る。はじめてこの道を称すとも、人気興らず。しかれども、誠を積み、日夜回村し、怠らず倦まず、入札をもって善を賞し、入札をもって貧を救うときは、ついに人気興起して、後にはその(投票)幸たる者、村民のために廻らざるに至る。これ時勢の然らしむるところ、天理自然のものなり。」

\* 尊徳自身の桜町三村の廻村については、夜話135参照

「これ時勢の然らしむるところ、天理自然のものなり」といわれるように、全き意味の人気は天人一貫の根底をもつ時熟的なものである。上記の秘稿上237と呼応して、天保4年8月10日の日記に曰く、「万物生き居ることは、一円空の中に有り、この有ること、よくよく取糺し見るに、水中に塵かまた灰を落し、棒にて搔きまわせば、水のまん中、水の廻り居るうちは、塵かたまり居るものなり。水廻り止めば、塵散乱して塵土の塊なし。万国土、みな然り。人間の体、命あるもの、日月の行道、また春夏秋冬四時、廻るうちなり。廻り止むとは、(灰と同様)また然り。万民株・家督・田地・田畑・山林・居屋敷・金銀米穀・家財諸道具、人の行道止むときは、一つもなくなり、空しくなり行くものなり。民の家業と日月の行進と四時の順行と、本来一つなり。よくよく本を知りて勤め給え、行道し給え、行道し給え、行道し給え」(全一、518-9)。まさに「仮りの身」を「元の主に貸し渡し」、天地の不止不転の行道と軌を一にして自ら躰めて息まざる時、時熟して「時勢の然らしむ

るところ、天理自然のものなり」といわれる「人氣」が天人一貫的に現成するのである。

たとえば、天保10年11月16日の牧甚五太夫宛の書簡には、「天の冥慮に相叶い候哉、人氣親しみ、米金繰り出し云々」(全六、605)とあり、弘化2年3月29日の星野利三郎宛の書簡にも、「天なる哉、時至り候哉、案外人氣相進み、多少に限らず起き返り云々」(全七、440)とあり、嘉永5年10月2日の中村勸農衛等宛の書簡にも、「天なる哉、時至り候哉、追々人氣相進み、村柄立ち直り候段、いつとなく公<sup>(幕府)</sup>邊に貫き云々」(全九、184)とあるごとく、後年の尊徳はくりかえし「天なる哉、時至り候哉、案外人氣相進み」と記しているが、彼のいわゆる人氣なるものは、「己をうち捨てて」、「仮りの身を元の主に貸し渡し、民安かれと祈るこの身」をもって、「人ため」一筋に生きる一円空にして一円仁の心の場に正しく時熟して天から贈られて現成する天人相即的にして自他共感的なるものとして、まさしく「上、天命に配し、下、人心に合し」、その窮極根柢を天そのものにもっているのである。すなわち「万物を恵みて形なき」天の気は、「天の分身」として自他をひとしく貫き、そこから自他は天の気を通じて相互に相通じ、同氣相求め共感するところに、人間存在の超越的根柢があるのである。それだけに、一円空にして「仮りの身を元の主に貸し渡し」、その「形なくして万物を恵む」一円仁の心を体して「人ため」の道にその一身を捧げれば、「身の節、天地に当り、氣、天地に通ず」るところ、「上、天命に配し、下、人心に合する」とともに、「人の氣にかない申すこと、これすなわち天の御氣にかない」、「天道人道相和して自然その身に備わり」、そこに「天なる哉、時至り候哉、案外人氣相進む」場が現成し、「天より自然に下し給える人々」は「その身その身の立つ所を知り」、「その身その身の在る所を楽しみ」、各々円成の「仁の器」として天人一貫の自己同一性をもって貫くとともに、互<sup>(た)</sup>振互<sup>(た)</sup>融の「人氣」として天人相即の相互共感性を享けるのである。「上、天命に配す」るところ、「天なる哉、時至り候哉」といわれ、「下、人心に合する」ところ、「案外人氣相進み」といわれるわけである。かくして「仮りの身を元の主に

貸し渡し」一円空にして、「民安かれと祈る」一円仁の報徳溯源道においては、時間的には、「天なる哉、時なる哉」の「人氣」の場が恵まれるのであるが、それはまた空間的には、孝経のいわゆる「敬するところの者、寡うして、説ぶ者、衆し」の場である。語録341に曰く、「孔子曰く、『一人を敬して、千万人悦ぶ。敬するところの者、寡うして、説ぶ者、衆し』と。我が法もまた然り。国君譲りて、これを行わば、すなわち国民生を安んじ、郡主譲りて、これを行わば、また郡民生を安んじ、村長譲りて、これを行わば、村民生を安んず。なお堯舜克く譲り、天下の万姓生を安んじ、業を楽しむ。これをこれ『敬するところの者、寡うして、説ぶ者、衆し』と謂う。』実に克く譲るところ、敬する者、寡くして、説ぶ者、多く、自づと天人一貫の人氣が生れるのである。

#### 例 「恵む手の見えぬ」報徳の道

もとよりかかる天人一貫の相互共感的な「人氣」の場が現成することは、「天なる哉、時なる哉」といわれているがごとく、容易ならぬことで、通り一遍の操作でこのような場が訪れて来るものではない。支配階級としての藩政自身の徹底的分度恪守による減税、農民の荒地開墾、耕地整理、植林、住宅建設、橋梁架設、治水工事、別して報徳金運営による借財返済・奇特人表彰等々、百般の生活再建方策が具体的に行われて、疲弊の極にあった農村の生活面自体に一陽来復の春が訪れてこそ、時熟して「悦ぶ者多く」「人氣」が盛り上がるのであるが、かかる一切の具体的施策を推進する運動の中心となるものは、何としても難村立直しの指導者としての報徳仕法家その人の実践そのものに魂を入れる心である。それでは「盤水(たらいの水)を回らす」中心の棒にたとえられた報徳仕法指導者自身の最後の心術は如何なるものであろうか。

それは、いうまでもなく、「形なくして万物を恵む」天の心を体し、「仮りの身を元の主に貸し渡し、民安かれと祈るこの身」をもって、「人ため」に生きぬく一円空にして一円仁の心術そのものであり、しかもその極から出る推譲の極、反対給付を求めぬ無償の行に住して行じ、行じて、そこに住せぬ無所住・無所得、為して為さぬ無為の報徳道こそは、天人一貫の人道の極

である。この場は、一円空にして一円仁の極、一円仁にして一円空、「恵む手の見えぬ」境である。教林89に曰く、「人に恵むなりとして、恵む手の見えるは、いまだ至らざるなり。井をうがちて飲み、田を耕して食し、年貢奉りて、扶食の貯えあり、お上よりお救いを得ずと、百姓の申すようになりたるは、堯の堯たるいわれなりということなり。」秘稿169と夜話95とはほとんど一語一句同じうして曰く、「堯、仁をもって天下を治む、民、歌って曰く、『井を掘りて以って飲み、田を耕して以って食う、帝の力何ぞ我にあらんや』と。これ堯の堯たる所以にして、仁政天下に及んで、跡なきが故なり。子産のごときに至っては、孔子、恵人と云えり。」さらに夜話244に曰く、「昔、堯帝、国を愛すること厚し、刻苦励精国家を治む。人民謳うて曰く、『井を掘りて呑み、田を耕して食う、帝の力何ぞ我にあらんや。』帝、これを聞いて、大いに悦べりとあり。常人ならば、人民恩を知らずと、怒るべきに、『帝の力何ぞ我にあらんや』と謳うを聞いて悦べるは、堯の堯たる所以なり。それ子が道は、『堯舜もこれを病めり』と云える大道の分子なり。されば、予が道に従事して、刻苦勉勵、国を起し、村を起し、窮を救うことあるときも、必ず人民は『報徳の力、何ぞ我にあらんや』と謳うべきなり。このとき、これを聞いて悦ぶ者にあらざれば、我が徒にあらざるなり、謹しめや、謹しめや。」

「帝の力何ぞ我にあらんや」と民が謳うを悦んだところに、「堯の堯たる所以」(語録、208)を認めた尊徳は、一円仁にして一円空の無為・無所得の境地を報徳道の極致として力説し、「大なるかな、堯の君たるや、巍々乎たり、ただ天を大となす、ただ堯これに則る」といった孔子の「巍々乎たり、舜禹の天下を有ちて、しかもこれに分らず」という個所をしばしば引いている。道話102に曰く、「舜聖は、『天下を有って与らず』と宣う。その位に在って、居たる御心なく在せらる。いわんや凡人においてをや、心得べきなり。」さらに語録190においても、その個所を引いて子孫へ譲る推譲の道を説き、南面無為の道を説く語録184においても、仁の字を独自の説文学で説く語録330においても、その個所を引いているのであるが、とくに語録156においては、

次のごとく各人の生活現実と密着させて説いている。「父母の子を育つるや、たとえ無頼の子となるも、また養育の費を算せず。農父の力田するや、たとえ饑饉の災に遇うも、また培養の費を算せず。舜禹の天下を有って、しかも与らず、もって道を万世に伝え、釈氏の五位を避け、もって法を万歳に遺す。これなお物を購うに、金囊を解くがごとし。我が道を行う者、よろしくこの心を存すべし。」まさに語録122の末尾に引かれているごとく、「孝弟の至りは、神明に通じ」、「思わずして得」、「為すなくして為る天」の心に通ずるものは、無条件的に愛する一円仁の心に徹した無償無為無心の道であり、一円空の場であり、それは具体的には素王報徳または玄聖素王の道である。この一境に至れば、名も位も称号もすべてその光を失い、ただ赤肉団上一無位の真人の面目が脱体现成するのみである。天保4年9月の日記にくりかえし示されるごとく、名は外への関係において相対的につけられるものであって、そのもの自体はただ自身在るだけである。「白きもの、白きを知らず、黒きもの、黒きを知らず、黄なるもの、黄を知らず、青きもの、青を知らず、赤きもの、赤きを知らず」(全一、522)、「本来ことごとく外の色合いを悟りて、我が色を知るものなり。人また然り。外に見合せて我を善しとも悪しくとも、上とも中とも下とも、上々下々とも、我の他人の行状にまかせて、他人なりに我をただ定めおくのみ」(全一、522-3)。したがって、自己自身が行じるところに現成するものが、内外一如の真実であるならば、それだけですべてが全きを得るのである。秘稿下201に曰く、「王業を行えば、すなわち王なり。王号を好むに及ばず。畑に茄を植うるときは、茄畑なり。桶に水を入れるれば、水桶、肥を入れるれば、肥桶なり。四海の大平に漂い、金銀財宝を借り集めて、富者のごとくに遣う。これ畑に茄を植えずして、茄畑というがごとし。富者を願わば、富者の道を行うべし。この道を行う者もまた然り。この道を行わば、自らこの道の名あり。道を行わずして、徒らに道を称す、あにその理あらんや。」まさに「王業を行えば、すなわち王なり、王号を好むに及ばず」といわれるのであるが、見聞記29によれば、「天地人の三才を貫く人、王なり、堯舜・聖人、真の王なり」といわれるの

である。王業を行う人とは、天地人の三才を貫く人として王であるが、しかもその人は王号を好むに及ばぬ存在として、中江藤樹のいわゆる「玄聖素王の道」（藤樹全集三、276）を貫く人である。かくして二宮尊徳も中江藤樹とともに「玄聖素王の道」に生きぬいたのである。

#### ㊦ 報徳全功の道

素王報徳の道に徹しぬいた尊徳は、自らその道を貫くとともに、真に斯道を行くだけの精神と力量とをそなえた同志に対しては、俸禄を辞して赤裸一貫開闢元始の道に生きることを説くとともに、その道を貫くに必要な現実的条件について必要な措置を講じ、その徳に報いたのであった。天保13年幕臣に登用せられた尊徳は、当時報徳仕法施行をめぐる困難十個条をつぶさに検討した挙句、よく一道の活路を見出すものとして、俸禄を辞退して赤肉団上一無位の真人として、報徳仕法に身を捧げぬく、一円仁にして一円空に徹する素王報徳道を次のごとく説いている。「万世まで不朽に大道流行の儀は、この道に止まり候につき、<sup>(弟子)</sup>隨身、無益の言語を費し、無益の心志を勞することなかれ。この道を受けて行わんとする者、日暮れても、寝ねず、食に当っても、食わず、寝食を忘れ、寸陰を惜しみ、生涯無位無禄に独居し、寒に当って寒を憂えず、暑に当って暑を厭わず、昼夜怠らず、かくのごとくして行うときは、大道永く存し、毛頭差支えこれなく候間、隨身の面々、それこれを勤めよ」（秘下、159-160）。まさにベラー博士のいわゆる「ヘラクレス的活動」の全人格的推進力をここに見るべきであろう。事実、報徳仕法中有終の美をなした唯一のケース相馬仕法の指導者富田高慶・斎藤高行は、いずれもこの道を歩みぬいたのであった。

その際、尊徳はかかる封禄を辞退して報徳の道を行い、一円空にして一円仁の道を行く人士には、ちゃんと開闢元始的に得られ、天地の賜物としての天禄にあづかる道を講じているのである。語録312に曰く、「我が道は大業なり。故にこれを行う者は、よろしく位禄を辞すべし。これ推譲を貴び、成功を全くする所以なり。しかれどもその大業を勤むるには、口糧盤費<sup>(飯米食費)</sup>なかるべからず。故にこれに代えるに、<sup>(開墾田)</sup>墾田の産粟<sup>(産米)</sup>をもってす。或いはこれを辞す。

曰く、なかれ、吾が有なくして、徒らに推譲と称するは、<sup>(乞食)</sup>流乞の断食を称する<sup>(自慢す)</sup>ると、なんぞ異らん。それ吾が有にあらずして、譲るは、易く、吾が有にして、譲るは、難し。その位禄を辞するは、道を行うためなり。その墾田を受くるは、業を勤めるためなり。その受くるところの口糧盤費を儉し、もって余財を推す。これをこれ真の推譲と云うなり。」まさに禄位を辞して民生尊重の道にすべてを捧げる一円空または絶対無の道は、自他すべてを生かす一円仁の実をあげる「全功の道」であること、斎藤高行が身をもって実践し、その報徳外記の第22以下の「全功」の章でつぶさに説く通りである。相馬藩士にして富田高慶の報徳全功の道の実践をつぶさに見とどけた志賀直道は、その間の消息を次のごとく留岡幸助に語っている。「相馬<sup>(相馬藩)</sup>にては、『郡代次席』百五十石高にて、富田を招きしときも、先生これを受けしめられざりき。郡代とは、政治係役にして、家老の次位なり。家老に二種あり、軍事の方と経済の方との二つあり、『御勝手係』に属する方にて、この次の役なりしなり。その禄を食む<sup>(食)</sup>という、藩より自由にせらるるなり。禄を受けねば、臣にして臣にあらざるがごときものなり。食わずには、働らけぬによりて、二宮より金をやって相馬の荒地を早く開発させて、百両をもって十町の田地出来る割なり。此方より食うことをして、藩よりは決して禄を受けぬなり。その国の改革は、禄を食<sup>(食)</sup>まずしてやるなり。これが、先生の主義なり。ところが、藩の方では、一段久助にやりしものなるをもって、そういう精神なれば、仕法の入費の方に加えることになしたり。この金だけをもっても、仕法は十分に出来るなり。これが先生の高慮なりしなり。富田久助のごとく、禄を辞してやれば、先生の方より幾莫にても金を出されたりしなり。かくのごとき人多く出て来れば、必ず相馬の興復は自然と出来る都合なりしなり」(日記Ⅱ、621)。政治の表裏の力学を完全に掌握して水も湧らさぬ方策を講じて、一円空にして一円仁の天人一貫の道を貫いたところに、二宮尊徳の「ヘラクレス的活動」の秘密があったのである。一円空にして一円仁、よく有終の美をなす報徳全功の道こそは、「上、天命に配し、下、人心に合する」人道を発して、天道を粧い飾るのである。荀子の人道は、「人を<sup>(人)</sup>錯きて天を思わ

ば、すなわち万物の情を失う」自立不依の人道であり、尊徳の人道は「天道に違うにはあらず、天道に順いつつ、違うところある道理」に立脚する天人相即の人道である。かかる立場に立つ尊徳の報徳の道は、窮極的には、人道中心の小孝的内在的報徳の地平をこえて、「報徳は天税なり」といわれるごとく、「元の主」、「本の父母」といわれる天そのものに対する大孝的超越的報徳の道となり、自家・同族のみならず、「天の自然に下し給える人々」のために尽してやまない「人ため」の道において、「天地と共に行き、天地と共に勤め、天地と共に尽す」人道を発して天道を粧い飾る天人相貫の道となるのである。農耕体験を一日も離れなかった尊徳の人道は、天人相即的であり、儒学者であった荀子の人道は天人分離的である。

## The Way of the Universe, The Way of Man

Yūkichi Shitahodo

The purpose of this paper is to introduce the fundamental structure of practical philosophy of Sontoku Ninomiya, so called “Hōtoku tetsugaku”.

This also shows the way how he gets his personal identity as well as the empathetic relations with the people around him.

As a whole, this paper makes clear the practical philosophy of Sontoku Ninomiya and shows its outline.